

[論文]

再考・文学少年キーツの見た 自由主義者リー・ハント

奥田喜八郎*

Second Thoughts on the Young Poet Keats's Views of the Liberal Leigh Hunt

Kihachiro OKUDA

The purpose of this paper is to clarify the young poet John Keats's views of the liberal James Henry Leigh Hunt (1784–1859) in Keats's sonnet entitled "Written on the Day that Mr. Leigh Hunt left Prison." The first thing to explain is that a sonnet is a poem that has 14 lines. Each line has 10 syllables, and the poem has a fixed pattern of rhymes (/abba//abba//cdc//dcd/), which is called the "Italian Form" or "Petrarchan Sonnet." This is a sonnet containing an octave with the rhyme pattern /abba//abba/ and a sestet of various rhyme patterns, such as /cdc//cdc/ or /cdc//dcd/. Francesco Petrarch (1304–74) was an Italian poet, scholar, and humanist who is famous for *Canzoniere*, a collection of love lyrics.

The second is to explain that Keats knew Leigh Hunt to be an editor in chief of *The Examiner* (1806–21). Leigh Hunt also is known for his essays defending romanticism. The magazine had a great influence on young poets in those days: John Keats, Percy Bysshe Shelley

*おくだ・きはちろう：敬愛大学国際学部教授 英米文学概論・英語史・異文化コミュニケーション

Professor, Faculty of International Studies, Keiai University; English Literature History, English Language Origins, Introduction to English and American Literature, Intercultural Communication.

(1792–1822), and John Hamilton Reynolds (1794–1852).

The third is to explain that Leigh Hunt had meanwhile joined his brother John on the weekly *The Examiner* (1808), where he continued until 1821. Both brothers were sent to prison for two years in 1813 for attacking the Prince Regent (1811–20) (=George IV, 1762–1830), and the experience damaged his health. Leigh Hunt was not a political journalist as such, but the general tone of *The Examiner* was unsympathetic to the Tories and evoked a considerable response.

The fourth is to explain that the Tories were originally members of the party who were loyal to King James II in 1688, opposed the Revolution (Whig), and later favoured the Stuarts and opposed the accession of George I (1660–1727) on the death of Anne (1665–1714). The Whigs were members of the party earlier called the Roundheads, which during the 17th and early 18th centuries opposed the Royal prerogative and Episcopacy, upheld the supremacy of Parliament, and favoured toleration for Dissenters; later in the 18th century, the Whigs were the party who opposed the Stuarts and supported the Hanoverian and Protestant succession. The Whigs developed in the 19th century into the Liberal Party.

The fifth is to explain that John Keats states that Leigh Hunt is remembered as an excellent journalist and critic, just like Edmund Spenser (?1552–99) and John Milton (1608–74). Leigh Hunt is remembered as a minor poet, for his recognition of Shelley and Keats. The seventh is to explain that the phrase “the sky-searching lark” is Keats’s own new phrase. A lark is a small brown bird which makes a pleasant sound. The eighth is to explain the lark’s imagery and symbols specified in English literature history: Geoffrey Chaucer’s “the bisy larke” in “Knight’s Tales,” William Wordsworth’s “Type of the wise, who soar, but never roam” in “To a Skylark,” Shelley’s “Profuse strains of unpremeditated art” in “To the Skylark,” and so forth. The word *lark* is from the Middle English *laverok*, from the Old English *lawerce*.

In conclusion, John Keats states that the first great sun of Edmund Spenser once shone as the great poet in the sphere. The second great sun of John Milton also shone as the great poet in the sphere. Keats examines in this sonnet that the third great sun of Leigh Hunt shines as the great critic in the sphere as well. Keats indicates that “What though Leigh Hunt was shut in prison, yet he has, in his immortal spirit, been as free as the sky-searching lark, and he has been as elate as the sky-searching lark” as well. Leigh Hunt is a carefree or spirited adventure as the sky-searching lark.

文学少年 John Keats (1795 – 1821) は、イングランド国教会 (The Church of England) 系統の聖職者 the Reverend John Clarke の教育を受けて育った。また、その子 Charles Cowden Clarke (1787 – 1877) と親しくなった。その頃から、たえず Keats は、

友人 Clarke から書物を借りて、文学の鑑賞にふけた。書物だけではなく、当時の有名な週刊誌 *The Examiner* (1808 - 81) を借りてよく読んだ。この週刊誌によって、その編集者であり詩人でもある James Henry Leigh Hunt (1784 - 1859) が熱気を帯びて語る、Leigh Hunt の自由主義的社会改革論などの思想や精神にいたく共鳴するようになり、Keats 自身もまた、いつしか「市民の自由と宗教の自由」を愛する文学少年に目覚めるのである。

ここにいる、Leigh Hunt について、植田虎雄は、こう語る。

Leigh Hunt は、イギリスのジャーナリストで、詩人で、批評家で、随筆家であるという。Leigh Hunt は、牧師の家に生まれ、Christ's Hospital (1791 - 99) に学び、1808 年に兄 John Hunt とともに、*The Examiner* 誌を創刊して、その編集に当たり、文学や、演劇はもちろんのこと、政治・社会全般の問題について進歩的立場に立って、論評を加えたという。

ここにいる、Christ's Hospital とは、イギリスの Sussex 州の、Horsham にある学校である。紺の上着に、黄色い靴下という生徒の服装から、'Bluecoat School' とも呼ばれる。1552 年に、イギリス王 Edward VI (1537 - 53) によって、London の、St. Paul's の北方、Newgate Street の北側 (Grey Friars の修道院の跡) に、貧民の子弟を收容するために設けられたのだが、しかし、1902 年に、現在の地に移されたという。Christ Hospital ともいう。卒業生には、William Camden (1551 - 1623)、Samuel Taylor Coleridge (1772 - 1834)、Charles Lamb (1775 - 1834)、Leigh Hunt、Edmund Charles Blunden (1896 - ?) などがいるという。

Leigh Hunt は 1808 年に、*The Examiner* を創刊する。翌年 1809 年に、結婚する。そして、Leigh Hunt は、1810 年には季刊誌 *The Reflectou* をおこし、Charles Lamb や William Hazlitt (1778 - 1830) に、そのすぐれた評論や、随筆などの発表の機会を与えたという。1811 年には、軍隊内の鞭打ちの悪習を非難したために、起訴されたが、幸いに刑を免れたという。けれども、1812 年には、時の摂政皇太子嘲罵の文を、*The Examiner* 誌上に発表したのも、兄 John とともに、罰金 500 ポンドと、禁固 2 年 (1813 - 15) の厄にあったという。

しかし、Leigh Hunt は入獄中も、George Gordon Byron (1788 - 1824) や、Thomas Moore (1779 - 1852)、Jeremy Bentham (1748 - 1832)、Charles Lamb などの訪問に慰められつつ、1814 年に、長詩 *The Feast of the Poets* を著わし、かつ *The Examiner* の編集を続けたという。また、John Keats (1795 - 1821) や、Percy Bysshe Shelley (1792 - 1822) と親しみを深め、この、二人を世に推薦したのも同じ *The Examiner* 誌上であった。詩人 Leigh Hunt は、Paolo and Francesca の物語を材とした長詩 *The Story of Rimini* を、1816 年に著わした。

ここにいる、Paolo and Francesca という物語は、Ravenna 伯爵 Giovanni de Polenta が、Rimini の Giovanni Malatesta に、戦功の報酬として、その娘 Francesca を与えたというものである。彼女は夫 Giovanni Malatesta の弟、即ち、美貌の Paolo と不義の恋に陥ったが、しかし、露見して 1289 年に、兩人ともに殺されたという悲恋物語である。イタリアの詩人 Dante Alighieri (1265 - 1321) が、「地獄篇」(Inferno) 第五歌の終わりに、Francesca の告白を歌っているのが、有名である。

Henry F. Cary の英訳版によると、曰く、
... Francesca! Your sad fate
Even to tears my grief and pity moves.
But tell me; in the time of your sweet sights,
By what, and how Love granted, that ye knew
Your yet uncertain wishes?" She replied:

と語る。フランチェスカがこう語る。平川祐弘訳によると、

「不幸の日にあって
幸福の時を思い出すほど辛い苦しみは御座いません。
しかし私どもの愛の発端を貴方がそれほど
知りたいとお望みならば、

といって、泣きつつ物語る世界である。

この悲恋物語に共感した詩人 Leigh Hunt は、その翌年から、*Blackwood's Magazine* などの保守系雑誌からの、いわゆる、‘Cockney School’に対する激しい攻撃が始まったけれども、Leigh Hunt は、ひきつづき、1818 年に、詩集 *Foliage* を、そして、翌 1819 年に、*Hero and Leander* を、さらに、*The Poetical Works of L. Hunt* 三巻などを出版し、また、週刊誌 *The Indicator* (1819 – 21) を創刊したという。

ここにいう、Cockney School の Cockney という語は、中英語で、*cocks' egg* の意味である。初めは出来損ないの卵を指したらしく、転じて、弱々しい者や、都会人、終に、ロンドン児や、ロンドン訛りの意味となったという。19 世紀に、Leigh Hunt や、Hazlitt などが代表する London の一群の作家詩人が批評家 John Gibson Lockhart (1794 – 1854) によって、‘Cockney School’ と綽名されたという。

Leigh Hunt は、1821 年に、*The Examiner* の編集をやめて、その翌年 1822 年に、イタリアに渡り、Shelley、Byron と協力して雑誌の発行を志したが、Shelley の思いがけない死によって、こと志と違い、*The Liberal* (1822 – 23) はわずかに 4 号で絶えたという。また、Leigh Hunt は、Byron に失望して、故国に帰り、1828 年に、*Lord Byron and Some of his Contemporaries* を出版する。さらに、Leigh Hunt は、精力的に、週刊誌 *The Companion* (1828) や、日刊紙 *The Teller* (1830 – 32) を、そして、*Leigh Hunt's London Journal* (1834 – 35) などを刊行したという。

帰国後の、Leigh Hunt の、後期の活動としては、1840 年に、劇 *A Legend of Florence* と、1844 年に、試論 *Imagination and Fancy*、1846 年に、その姉妹編 *Wit and Humour* などを出版したという。そのほかに、*A Jar of Honey from Mount Hyble* (1848)、*The Town* (1848)、*The Autobiography* (1850)、*Table Talk* (1851)、*The Old Court Suburb* (1855) などの散文があるという。

Leigh Hunt のめばしい詩作には、上記のほかに、戦争の惨禍を主題とした、*Captain Sword and Captain Pen* (1835) があり、また短詩としても、最もすぐれているのは、“Abou Ben Adhem,” “Jenny Kissed Me” などであろうかという。

ここにいう、“Abou Ben Adhem” / əbú: bən ædən/ とは、天使の手帳に記されなかった Abou の名が、同胞を愛する故に、その筆頭に記されるに至るという話である。

また、“Jenny Kissed Me” とは、軽い気分で愛を歌ったロンドー体の詩 (rondeau) である。これは、通例、三連 15 行で、2 脚韻からなり、第一連の最初の語句が、次

の第二連の句 (refrain) として用いられるフランス起源の詩型である。脚韻は一般に、aabba, aabb refrain, aabba refrain の形式をとるといふ。この作品は、1838 年の、*The Monthly Chronicle* に掲載されたようである。

要するに、この、エッセイスト Leigh Hunt は、雑談と詩とを同一視したために、区々たる小事を書きつける弊が多いけれども、100 年以上も、イギリス詩壇にはびこってきた Heroic couplet の弊風を改めた功績は大であるという。ここにいう、Heroic couplet とは、「英雄対連」といい、「弱強調 (iambic) 五歩格」の押韻する、2 行連句で、特に、修辭的単位を成し、高尚な文体で書かれているものである。例えば、

Know then thyself, presume not God to scan,

The proper study of Mankind is Man

という風に、scan, Man と押韻するのである。「されば汝自身を知れ、神を吟味せんとすることなかれ、 / 人間の眞の研究対象は人間なり」という意味であらうか。これは、イギリスの詩人 Alexander Pope (1688 - 1744) の作品である。

また、Leigh Hunt は、新進詩人を世に紹介したことの功は、文学史家の見逃せない点であるという。文学批評家としての、Leigh Hunt は、多くの定期刊行物を創刊して、他方面にわたる問題を自由な健筆をもって論じ、一時は文壇に雄飛したが、しかし、晩年の Leigh Hunt は、窮乏のために、友人 Charles Dickens (1812 - 70) の小説 *Bleak House* における、利己的でありながら、無邪気を装っている人物、Harold Skimpole のモデルとして、嘲りを受けるなど、悲惨な晩年であったという。

以上が、日本に知られている、論客 Leigh Hunt の概略である。そして、詩人 Keats の友人 Clarke とは、イギリスの著述家であり、出版者である。妻 Mary Victoria Cowden (1809 - 98) との共著に、1878 年に出版した『作家たちの思い出』(*Recollections of Writers*) がある。妻の Mary には、1844 年頃に出版した、別の、『完全なシェークスピア用語索引』(*Complete Concordance to Shakespeare*) があり有名である。

また、週刊誌 *The Examiner* というのは、2 種類あるので、要注意。(1) は、1710 年から 12 年までの、2 年間発行されたものである。これは、Henry St. John、のちに Bolingbroke 子爵によって創刊された、保守党の機関紙である。1711 年 6 月までは、あの、Swift が編集を担当した。当時の主な寄稿家は、イギリスの諷刺作家 Jonathan Swift (1667 - 1745) や、イギリスの詩人で、外交官である、Matthew Prior (1664 - 1721) などであったという。40 号ほど出して廃刊となる。

詩人 Keats が関係するのは、それから数えて、96 年後の、(2) の、*The Examiner* である。これは、重複するが、Leigh Hunt が兄とともに創めた雑誌で、社会百般の事を論じ、その独立不羈の内容は、近代英国ジャーナリズムの発展に多大の貢献をなしたといわれている。Leigh Hunt は 1821 年まで、主筆をつとめて、当時の若き詩人たち、例えば、Shelley、Keats、Reynolds の眞価を世に紹介したという。その後、主筆は順次 Fonblanque、J. Foster、H. Morley などの手に移ったという。本誌は、はじめ、Romantics、後には、Landor の研究に、重要な資料であるという。

ここにいう、Shelley とは、あの有名な、イギリスの詩人 Percy Bysshe Shelley (1792 - 1822) を指す。詩人 Shelley に関しては、後日、稿を改めて、論述するつもりである。また、Reynolds とは、イギリスの詩人 John Hamilton Reynolds (1794 - 1852)

を指す。彼は、London の、St. Paul 校に学び、1814年に、2巻の詩集を出版する。Keatsの友人で、1816年以来、文通していたといわれている。

また、Fonblanque とは、イギリスの急進的なジャーナリストの、Albany Fonblanque (1793 – 1872) である。彼は、1826年から、*The Examiner*の主筆であり、編集者であり、所有者であったという。彼の評論を集めたものに、1837年出版の、*England under Seven Administrations*がある。

Foster とは、イギリスの歴史家で、伝記作家の、John Foster (1812 – 76) をいう。彼は、London 大学に学び、1843年に、弁護士になったという。Leigh Hunt と相知りあい、1833年に、週刊誌 *The Examiner*の演劇批評家となり、のちの、1847年から1855年の8年間、*The Examiner*を編集したという。

編集者兼詩人 Leigh Hunt は、1812年3月22日の *The Examiner* に、当時の摂政皇太子 (the Prince of Wales) をやり玉に挙げた。それは痛烈な論評であった。そのために、Leigh Hunt 兄弟は、名誉毀損で訴えられて、それぞれ500ポンドの罰金と2年間の懲役の判決を受けた。これがイギリス全土で、大きな反響を呼んだという。

そして、大人しく刑に服した Leigh Hunt が、1815年2月2日に出獄する、というその日を祝って、文学少年 Keats は「リー・ハント氏が出獄するその日を祝して記す」(“Written on the day that Mr. Leigh Hunt left Prison”) と題する14行詩を書き上げて、出獄する Leigh Hunt を出迎えに行く、友人 Clarke に、その作詩を手渡したという。当時、Leigh Hunt は、28歳であり、文学少年 Keats は、17歳であった。11歳の年長者 Leigh Hunt である。

要するに、当時の文学少年 Keats の見た自由主義者 Leigh Hunt の一端を、この14行詩を通して窺おうというのが、この拙文の主旨である。文学少年 Keats は、まず、こう歌い上げるのである。

What though, / for show / -ing truth / to flat / -tered state,
Kind Hunt / was shut / in pris / -on, yet / has he,
In his / im-mor / -tal spir / -it, been / as free
As the / sky-search / -ing lark, / and as / e-late.
Min-ion / of gran / -deur, think / you he / did wait?
 Think you / he naught / but pris / -on walls / did see,
 Till, so / un-will / -ing, thou / un-turn'dst / the key?
Ah, no! / far hap / -pi-er, no / -bler was / his fate.
In Spen / -ser's halls / he strayed, / and bow / -ers fair,
 Cull-ing / en-chant / -ed flow / -ers; and / he flew
With dar / -ing Mil / -ton through / the fields / of air;
 To re / -gions of / his own / his gen / -ius true
Took hap / -py flights. / Who shall / his fame / im-pair
 When thou / art dead / and all / thy wretch / -ed crew?
(音節は筆者によるもの)

これは、イングランドの女流批評家 Miriam Allott (1918 – ?) が編集した『キーツ

全詩集』(Keats: the Complete Poem, 1986) から引用した sonnet である。Allott 説によると、

Composed 2 Feb. 1815: Hunt was released 2 Feb. 1815 after serving a sentence of two years' imprisonment for a libellous article on the Prince Regent in *The Examiner*, 22 March 1812.

と紹介する。この詩作は、1815年2月2日であるという。それは、Leigh Huntが自由の身となる日である。思い返せば、あれは、1812年3月22日に発行した、週刊誌 *The Examiner* 誌上での、当時の皇太子 Regent の無能振りを暴露した論説で、世間を沸かせた。そして、名誉毀損罪で、2年の禁固刑を受けて、投獄された。そのお勤めを終えて、自由の身となったのが、1815年2月2日であるという。形容詞 libelous は、libelous という意味である。

そして、Allott は、それに続けて、

Cowden Clarke records that K. gave him the sonnet when he was his way to greet Leigh Hunt newly released from prison, and also notes, 'Leigh Hunt's *Examiner*—which my father took in and I used to lend to Keats—no doubt laid the foundation of his love of civil and religious liberty' (Cowden Clarke 127, 124).

と言及する。友人 Cowden Clarke については、既に上記に紹介しておいた。友人 Clarke の記憶によると、詩人 Keats がその作品を友人 Clarke に手渡したのは、自由の身となったばかりの Leigh Hunt に会いにゆく途中であったという。Leigh Hunt の週刊誌 *The Examiner* は、父 John Clarke が購読していたもので、Clarke はそれを友人 Keats にいつも貸していたという。疑う余地もなく、詩人 Keats には、既に、市民に対する愛や、宗教の自由などの下地が身に付いていたという。それは、飽くまでも、Leigh Hunt 風のものである。

その上、Allott は、

K. himself did not meet Hunt until Oct. 1816.

という。Keats 自身、1816年10月までずうっと Leigh Hunt に会わなかったという。出獄したのは、1815年2月2日であることを思うに、それから数えてみると、約20ヵ月後に、詩人 Keats は、尊敬の人 Leigh Hunt に会うことになるのである。

松浦暢が『キーツのソネット集』(Keats' Sonnets) の中で、

このソネットは、原稿現存せず dating 不詳であるが、表題よりして、リー・ハントが Horsemonger Lane Gaol より出所した 1815年2月2日か、その翌日の3日に書かれたものと思われる。

と憶測する。3日に書かれたとなると、Allott 説の中の、「友人 Clarke が、出所する Leigh Hunt に会いにゆく途中、Keats から手渡された」という、Clarke の記憶と食い違うことになる。ここにいう、刑務所 Horsemonger Lane Gaol について、Blue Guide によると、

Horsemonger Lane Gaol, in which Leigh Hunt was confined for two years for libelling the Prince Regent as "a fat Adonis of 50" (1812), stood in Union Road, off the Borough High Street.

と説明する。名詞 gaol /dʒeɪl/ は、イギリス語である。アメリカ語で、jail /dʒeɪl/ という。アメリカの多くの州では、留置1年以内のものを、jail といい、1年以上のものを、prison とよび分けているという。

重複するが、Leigh Hunt は、この刑務所に入れられ、2年間監禁されたという。それは、「50歳の一人のぶくぶく太ったAdonis」と題して、当時の皇太子Regentの無能振りを暴露したために、その名誉毀損罪で、投獄されたのである。場所は、London Bridgeを渡って、南下すると、目の前に、荘厳なSouthwark Cathedralが聳え立つ。それを右手に眺めながら、左折すると、London Bridge Stationが見える。

左折しないで、Borough High Streetをそのまま南下すると、St. Thomas's Churchが左手に見えてくる。それを左手に見て、通り過ぎると、その教会の後方に、Guy's Hospitalが聳える。詩人を志す以前のJohn Keatsは、かつて、この病院で、医学を学んだことがある。それを左手後方に見ながら、さらに、Borough High Streetを南下すると、十字路に行き着く。そこを右折すると、Union Roadである。この、Union Road沿いに、この、Horsemonger Lane Gaolがあるという。ここで、Leigh Huntは、2年間の勤めを終えるのである。

松浦は、それに続けて、

『1817年詩集』に所収。この辺の事情はクラーク (Charles C. Clarke) の次の文に興味深く書かれている。

At the last gate, when taking leave, he (Keats) gave me the Sonnet entitled, "*Written on the day that Mr. Leigh Hunt left Prison.*" This I feel to be the first proof I had received of his having committed himself in verse; and how clearly do I recall the conscious look and hesitation with which he offered it!

と紹介する。ここにいう、the last gateというのは、刑務所の中の最後の通用門をさすのか。その通用門を離れようとした時、Keatsが、自分に手渡したのが、「リー・ハント氏が出獄するその日を祝して記す」と題する、このSonnetであるという。これは、Keats自身の思いをこの詩に託したということを、あの時、受け取った最初の証である、とClarkeはしみじみと思うという。Keatsがそれを差し出したときの、彼の自覚した目つきと、狼狽の色が今でもはっきりと思い出される、とClarkeはいう。これは、医学者を諷め、詩人を目指す、文学少年Keatsの心の風景を生きたと明示した、友人Clarkeの記憶である。

松浦は、さらに、それに続けて、

従来、リー・ハントとキーツの関係については、色々の批評家が詳述してきたところで、いまさら饒舌は要しない。リー・ハント投獄の事情について簡単に述べてみよう。

といい、

元来polemicなidealistであったハントは*The Examiner*の編集者として、議会の改革、民事刑事法の改正、課税の均等化、奴隷制の廃止のような問題を熱心に唱導、党・個人に関係なく憲法、行政権の乱用を激しく攻撃した。

と論及する。形容詞polemicとは、論戦の、という意味を持つ。名詞idealistとは、理想主義者、という意味を持つ。Leigh Huntは、論戦好きの理想主義者であるという。色々な社会問題を取り上げ、発表している論文を見ると、これは明らかであろう。

そして、松浦は、それに続けて、

折も折、Prince of WalesであるGeorge 殿下は、最初ホイッグ党に属し自由政

策を説いていたが、Regentに任命されるや、トーリー党に豹変、その政策をとるに至った。これに激昂したハントは“corpulent man of fifty”とか“a violator of his words”とかいって Prince Regent を攻撃した。このため名誉毀損罪で、1813年2月より向う2年間投獄された。

と言及する。名詞 Regent とは、Cobuild 版の英英辞典によると、A regent is a person who rules a country when the King or queen is unable to rule, for example because they are too young or too ill. と説明する。

当時の国王は、George III (1738 - 1821) であった。George III は、George II (1683 - 1760) の孫であった。この、George II の治世中 (1727 - 60) は、七年戦役 (Seven Years' War) があった時代である。

George III の治世中は、アメリカが独立した時代である。George III は晩年発狂して、長男 George IV (1762 - 1831) が、摂政を務めた (1811 - 21) という。これを、別に、Prince Regent という。摂政皇太子という意味である。彼は、Prince of Wales であったという。George 殿下は、最初 the Whig 党であったが、後に the Tory 党に豹変したという。この豹変を知った、Leigh Hunt は、怪しからん、といって、嘸み付くのである。

ここにいう、the Whig 党とは、もと、1679年王弟 (後の James II) をカトリック教徒であるという理由で、王位継承から排除しようとする法案を支持した人を軽蔑的に呼んだ語であるという。1688年以降は、the Tory 党と並ぶイギリスの二大政党となる。19世紀中葉以降は、今の自由党 (the Liberal Party) となったという。

Whig という語は、もと、スコットランド語の、*whiggamaire* からの発達語である。One who drives a horse という原義を有するという。1648年の西部スコットランドの反徒による Edinburgh 進軍が、‘the whiggamore raid’ と呼ばれたのが始まりであるという。

それに対して、the Tory 党とは、1688年 James II を擁護し、革命に反対した王権派のことをいう。その後は、Stuart 王家に味方し、Anne 女王死後、George I の即位に反対し、1832年の Reform Bill 反対後は、保守党 (the Conservative party) となる。

Tory という語は、アイルランドのゲール語の、*toraidhe robber* からの派生語である。pursuer という原義を有するという。

激昂した Leigh Hunt は、摂政皇太子を、“corpulent man of fifty” (「50歳の肥満体の男」) とか、“a violator of his words” (「約束を破る人」) とかといって攻撃したという。そのために、名誉毀損罪で、投獄されたことを、既に、上記に指摘しておいた。

松浦は、さらに、

その間、ハントは刑務所の一室を “a bower for poet” に改造し、天井に雲や空の絵を書き、ヴェネチアン・ブラインドの窓をかまえ、万卷の書物や詩人の石膏像を配し健筆をふるっていた。

と紹介する。刑務所の一室が、「詩人のためのあずまや」とは、恐れ入る。ヴェネチアン・ブラインドとは、Venetian blind のことか。これは、ひもで小札を開閉する、板すだれ、のことである。

松浦は、それに続けて、

そうした態度を、キーツは聞き及び、ハントに非常な親近感を抱き、上のソネ

ットを書いたのであった。Hunt と Keats の最初の出会いは、このあと、1816 年になってからであるが、その日付は、Blunden は 1816 年後期、Hewlett は 1816 年中頃、Rollin、Bate の両学者は 1816 年 10 月 9 日頃とみている。

と指摘する。ここにいう、Blunden とは、イギリスの詩人で批評家 Edmund Charles Blunden (1896 - ?) を指す。1924 年の春、東京帝国大学の招きに応じて来朝、1927 年の夏まで、英文学教師として大いなる感化を学生に与えたという。Hewlett とは、Dorothy Hewlett を指す。また、Rollin とは、Hyder E. Rollin をいう。Bate とは、W. Jackson Bate をいう。

松浦が指摘するように、そうした態度を、文学少年 Keats が聞き及んで、そんな Leigh Hunt に非常な親近感を抱いて、書き上げたのが、傑作「リー・ハント氏が出獄するその日を祝して記す」と題する、この sonnet である。

ご覧の通り、14 行詩である。まず、脚韻を見ると、state, he, free, elate, wait, see, key, fate, fair, flew, air, true, impair, crew という風に、押韻する。ご覧の通り、これは、/abba//abba//cdc//dcd/ という風に、整然と正確に押韻する。これは、完璧な脚韻である。これを「イタリア風 sonnet」という。別に、「ペトラルカ風 sonnet」ともいう。

その上、御覧のように、各行に 5 つの拍子がある。つまり、これは、「弱強調 5 歩律」(the Iambic pentameter) という、リズムである。しかし、気になるのは 8 行目のリズムである。

Ah, no! / far hap / -pi-er, no / -bler was / his fate.

つまり、11 音節であるからだ。これは、字余りである。1 音節多いのだ。思うに、問題は、比較級の、hap-pi-er, の 3 音節であろうかと思われる。しかし、この場合は、「1 語のなかで、隣接している 2 個の母音を 1 個の母音のように縮約して、ときにはまた、二重母音に転訛させて律読する」という、いわゆる、『母音融合』(Synaeresis) なる規定がある。この規定に従うと、

Ah, no! / far hap / -pier, no / -bler was / his fate.

というふうに、二重母音[iə]に転訛させて律読すると、全体のリズムに合致することになる。これで、リズムも完璧となる。

しかし、アメリカの出版社 The Modern Library Giant の『キーツとシェリーの全詩集』(John Keats and Percy Bysshe Shelley: Complete Poetical Works) の中に収められているそれと比べてみると、7 行目の unturn'dst が、unturned'st になる。前者の unturn'dst は、unturnedst の短縮形である。これに対して、後者の unturned'st は、恐らくは、unturnedest の短縮形であろうかと思われる。

念のために、イギリスの、Leeds 大学教授 John Barnard の『キーツ全詩集』(John Keats: The Complete Poems, 1988) 版を参考にとしてみると、unturned'st と歌う。

接尾辞 -est というのは、古語であり、詩語であって、thou に伴う動詞の二人称単数直接法現在形、および、過去形の語尾につける接尾辞である。これは、英語本来のものである。例えば、Thou singest [doest, passest, gettest, knowest, sayest, goest] という風に、用いられる。

別に、-st という接尾辞もある。これは -est の異形であるという。例えば、Thou preparedst, とか、Thou canst [couldst, dost, didst] というふうに使われる。両者の相

違は、ただ、歯擦音や、母音以外の後には、-st となることもある、という程度であるから、問題の *unturned~~est~~* でも、*unturned~~st~~* でもよいことになる。しかし、それにしても、Allott 版の、*unturn'dst* というのは矢張り気になる。*un-turn'dst* でも、*unturnedst* でも、御覧のように、同じ2音節であるからである。

Barnard 版の、*un-turned'st* は、*un-turned-est* の3音節を2音節に工夫し、その行を10音節として、全体のリズムに合致させているからである。しかし、これも、*un-turnedst* と2音節につづることも可能である。

このほかにも、Allott 版と、Barnard 版の両者を比べてみると、小さい相違がいくつか目に付く。例えば、(1)5行目は、

Minion of grandeur, (Allott)

Minion of grandeur! (Barnard)

という風に、comma が exclamation point であったり、また、(2)8行目は、

his fate. (Allott)

his fate! (Barnard)

という風に、period が exclamation point となる。さらに、(3)11行目は、

the fields of air; (Allott)

the fields of air: (Barnard)

という風に、semicolon が colon となっていたり、また、(4)最終行は、

When thou art dead and . . . (Allott)

When thou art dead, and . . . (Barnard)

という風に、接続詞 and の前に、comma の有無の相違がある。

思うに、句読点は詩人 Keats の文章心理を十分に伝えるものである。だから、句読点は非常に大切である。というのは、句読点は、(1)文を明瞭で読み易くするからであり、(2)構文を明瞭にし、語群を分離したり、まとめたりするからである。(3)書かれた語に意味を付け加えたり、文を読み進むときの理解の手引きとなるからである。

然し、colon と、semicolon の区別は厄介であるが、矢張り、重要である。colon は大体イコールの意味だという。semicolon は、形や名前から見ても、colon によく似ているが、しかし、両者の本質は違うという。colon は結合するが、semicolon は分離するからである。だから、semicolon は period に近いのである。がしかし、分離しながらも、つながっているのだという。これは、面白い句読点の解釈である。

念のために、Ernest de Selincourt が編集した『ジョン・キーツ詩集』(*The Poems of John Keats*, 1920) のそれを、Barnard 版のそれと比べてみると、ただ1箇所の相違があるだけだ。それは、最初の行の、

flatter'd (Selincourt)

flattered (Barnard)

のみである。Allott 版は、この、Barnard 版と同じである。これも、両者とも、*flat-ter'd*, *flat-tered* というように、2音節の形容詞である。

上記の句読点の使い方の相違を踏まえて、文学少年 Keats が声高く歌い上げる「リー・ハント氏が出獄するその日を祝して記す」と題する、この sonnet を精読し、味読してみることにしよう。思うに、詩人 Keats は「前半の8行」で1つの主題をう

たい、そして、「後半の6行」で別の主題を歌い定めるのである。これが、この sonnet の持つ、妙味である。

思うに、前者の「前半の8行」に、詩人 Keats は、自由に大空を飛びまわる「揚げ雲雀」(the sky-lark) に託して、新しい時代、新しい社会等を提唱する自由主義者 Leigh Hunt を厳格に歌い上げるのだ、と思う。そして、後者の「後半の6行」に、詩人 Keats は、先輩詩人 Leigh Hunt が、イギリスの文学史上における大御所 Edmund Spenser (? 1552 - 90) や、先輩詩人 John Milton (1608 - 74) の系列に並び立つ斬新な詩人である、と厳粛に歌い上げるのだ、と思われる。これが、筆者の解釈である。

このように、詩人 Keats は、これら2つのテーマをお互いにバランスよく保って、お互いに対比させながら、見事に、この14行詩を歌い納めているのだ、と思う。これが、詩人 Keats 独自の、Keats らしい、Keats ならではの、味わい深い詩境である。がしかし、読み返して見ると、到る所に、先輩詩人 Leigh Hunt 張りの語調や口調が激しく乗り移っているのも、却って面白い。例えば、1行目の

... for showing truth to flattered state,

であるとか、また、5行目の

Minion of grandeur ...

であるとか、さらに、最終行の

... and all thy wretched crew?

であるといった詩句は、まさしく Leigh Hunt 調である。このように、血気の勇 Leigh Hunt の生の影響を受けた、文学少年 Keats であるが、しかし、これが詩人 Keats としての初船出であることに注目したい。

The Examiner という雑誌は、重複するが、1808年1月3日、当時の国情と社会的雰囲気の中で、John Hunt と、Leigh Hunt 兄弟によって創刊された政治週刊誌である。また、その政治論に於いて、あくまで自由独立の態度をとろうとすることを表明した週刊誌でもある。この辺の事情を、上代たのが『リー・ハント』(Leigh Hunt, 1936) の中で、

勿論 *Examiner* の目標は単に政治の革新、言論の自由だけではなかった。広く社会の偽善、無知、迷信打破、わけでも優れた文学趣味の普及浸透であった。「愛国と文学」(“Patriotism and Literature”) というのがその2大目標であったが、主力は政治紙としての面目発揚に注がれたのは勿論であり、またそれが当然でもあった。殊にニュースの報道は *Examiner* 特有の軽快な文体とともに大いに新機軸を示したものである。

と説明する。そして、Leigh Hunt は、その *Examiner* 誌上に、1808年9月、「真理と正義」(“Truth and Justice”) の題下に、「威嚇的なナポレオンを排撃するとともに英国政府の対ナポレオン政策を露骨に批判」するのだ。その年の11月、Leigh Hunt は「陸軍腐敗論」(“Military Depravity”) を掲げて、「陸軍昇進問題に関する贈収賄事件」を暴露する。さらに、彼は1809年10月、「内閣の更迭」(“Change of Ministry”) という論説を掲載したり、また、翌年11月号に、彼は軍隊に於ける「苔刑論」(“Flogging”) で、「人道的な立場からその撤廃」を叫んだのである。そして、ついに、Leigh Hunt は、

1812年は *Examiner* に致命的な挫折をもたらした年であった。これより先アメリカ合衆国独立問題で遺憾なくその無能振りを暴露したジョージ三世がますます盲目となり、加ふるに精神が錯乱したので1811年には皇太子（後のジョージ四世）が代わって摂政となった。然し摂政皇太子は政治的にも人格的にも国民の期待を裏切ること実に甚しかった。即ち父王ジョージ三世治世の間は保守党政策に反対して、野にあった自由党に多大の希望をかけられていたが、一度摂政となるやたちまち政治的無節操を発揮して保守党内閣を居坐らせた許りでなく、私生活に至っては沙汰の限りで、その淫蕩と贅沢、不公平と横暴とは国民も等しく面をそむけるところであった。そこで1812年3月モーニング・ボウスト紙がこの摂政皇太子に諍って愚劣な讃辞を並べた時こそ、リー・ハントの義憤が一時に爆発して、ついに“The Prince on St. Patrick’s Day”という論説となって現れた。

という、当時の摂政皇太子の無能振りを暴露するのである。これは長い引用文であるが、当時の自由主義者 Leigh Hunt の活躍振りを彷彿とさせてくれる。そして、Leigh Hunt は、ついに有罪の宣告を受けて、獄中の身の上となるのである。

このような血気の勇 Leigh Hunt の生々しい影響を受けた、文学少年 Keats は、「こびへつらう議会」(flattered state) と歌い上げるのだ。また、摂政皇太子を取り巻く者たちを、「威厳のある寵児（寵臣）」(Minion of grandeur) と歌い下ろし、さらに、彼らを「惨めな境遇の仲間」(thy wretched crew) と歌い納めるのである。

これらの詩句は、どう見ても、暴露する社会改革者 Leigh Hunt の口調がそのまま乗り移った感じの、文学少年 Keats の、Keats らしからぬ語調である、と筆者は強調しておきたい。

なにはともあれ、大和資雄は「キーツと先輩たち」(“Keats and the Oldest Poets”) の中で、

原詩を読むと、キーツの用語は、きめがこまかく、詩行は緊縮して力強く、全体の起承転結の調和が美しい。この時点で既にキーツの方が師匠のハントよりすぐれた詩人であった。

と絶賛する。ここにいう「起承転結」というのは、中国の漢詩の、絶句の構成の名称である。別に、「起承転合」ともいう。これは、ご存知のように、「第一の起句」で、内容を歌い起し、「第二の承句」で、起句を承けて、「第三の転句」で、詩意を一転して、「第四の結句」で、全体を結ぶ、という漢詩の組み立てである。西洋に於いても、この漢詩の組み立てによく似たものがある。それは、sonnet である。文学少年 Keats の歌うのも、この、sonnet である。

この、イタリア風 sonnet の、14行詩は、「4行/4行/3行/3行」(前半の8行と後半の6行) から成ることを、既に上記に説明しておいた。別に、ペトルカ風 sonnet ともいい、この、前半の8行を Octave という。あるいは、Octet ともいい。それに対して、後半の6行を Sestet という。前者は詩想の上潮を示し、後者は詩想の退潮を示す。さらに、前半の8行は、4行と4行から構成されるが、この、4行のことを、Quatrain という。それに対して、後半の6行を構成する3行のことを、Tercet という。このように、イングランドの sonnet の押韻構成は、東洋の漢詩の絶句の詩型と全く同じ構成であるといえよう。

文学少年 Keats は、「最初の 4 行」(the first quatrain) の中に、「ヒバリ」(the sky-searching lark) を歌い示す。

What though, for showing truth to flattered state,
Kind Hunt was shut in prison, yet has he,
In his immortal spirit, been as free
As the sky-searching lark, and as elate.

と歌う。ヒバリについて一言。雲雀の種類は多い。一般に雲雀といえば, skylark を指す。Skylark の学名は、*Alauda arvensis* という。これは、ヒバリ科の留鳥である。特に後趾の爪が長いのが特長である。青空高く舞い上がりながら、すばらしい声で楽しそうに、春の喜びを歌いかなでる、代表的な小鳥である。これは、アゲヒバリとしてよく知られる。夜明けを告げる春の鳥で、快活・知恵の象徴として、イギリス文学の中によく登場する（「霊とヒバリ」との関係はこの拙文の終わりの方で詳細に論述する）。

また、雲雀は中空高く舞い上がる。そして、雲雀はまっすぐに降りてくる。しかし、その直下には巣はなく、着陸してから横とびして、巣にもどる、という非常に警戒心の強い小鳥である。

雲雀は、4 月から 6 月にかけて、地上の草地などに干草で巣を作る。そして、雲雀は、茶色の斑点の付いた卵を 3 個から 5 個産む。雲雀の主食は、虫や、草の種子や、草の若芽などである。3 月から 8 月頃まで、よくさえずるという。大きさは 20 センチ位である。茶色の縞模様の羽毛をもち、尾には白い羽毛のところがある。雲雀は興奮すると、冠毛を立てるという。

この、skylark のほかに、この種で、もう少し小さくて尾が短くて、林の中の木に止まって、もっと鋭い鳴き声を上げるのは、woodlark である。学名は *Lullula arborea* という。ほかに、冬にだけ、イギリスの東海岸によく見掛けるのは、shorelark である。学名は *Eremophila alpestris* という。

イングランドでは、skylark も、lark も、ともに雲雀であるが、アメリカでは、雲雀を、meadowlark（「マキバドリ」）という。オーストラリアでは、songlark（「ヒバリモドキ」）というようである。

雲雀の鳴き声は、teevo cheevo cheevio chee と鳴くようである。なによりも快活で元気な鳴き声であるのはうれしい。だから、イギリス人は、The boy is as happy as a lark（「その少年はとても楽しげだ」）という言い方を好むようだ。また、rise [get up, be up] with the lark（「朝早く起きる」）という言い方も好むようである。それにしても、イングランドで言い継がれているのが、

If the sky [fall] falls, we shall catch larks.

という諺である。これは、「もし空が落ちて来たら、ヒバリがつかまるさ」という、つまり、「取り越し苦労は無用」という意味である。日本では、「棚からぼたもちは落ちてこない」という諺がある。両者とも、「どうなるかわからない将来のことを、あれこれ思いなやんで、むだな心配をするな」という意味で、それを、イギリス人が雲雀に託しているのは、面白い。

上記のような、雲雀のイメージを踏まえて、文学少年 Keats は、先ず、

(He has) been as free as the sky- (searching) lark,
と歌うのだ。ここに歌う、人称代名詞 He というのは、無論、2行目の、Kind Hunt を指す。「親切なハント」とでも歌うのか。類似語がある。Kind, kindly, kindhearted, gracious などである。Kind とは、「親切な」心持ちや、性格を強調する。Kindly は、kind と同じ意味であるが、しかし、交替可能な場合も多い。特に親切そうな感じを強調する。例えば、a kindly face (「優しい顔」という風に、である。Kindhearted は、情に流されやすく、時に付け込まれやすい性質を示唆する。例えば、a kindhearted old woman (「お人よしの老婦人」という風に、である。Gracious は、地位の高い人や、年長者が目下の者や子供などに示す親切さについていうことが多いという。例えば、a gracious monarch (「慈悲深い君主」という風に、である。

形容詞 kind という語は、中英語で、*kinde* といい、「自然の、気立てのよい」という意味を持つ。古英語では、*gecynde* といい、「自然の、優しい」という原義を有するという。思うに、詩人 Keats は、この形容詞 kind に託して、Leigh Hunt の「根からの優しさ」や、「持って生まれた気立てのよさ」を歌うのだろう。

思うに、詩人 Keats は、

親切なハントは雲雀のように自由の人である

と歌うのだろうか。しかも、詩人 Keats は、ここに、he has been free, という現在完了形を用いるのだ。この現在完了形に託して、詩人 Keats が、先輩詩人 Leigh Hunt を、「歴史的に、振り返って」見ているのだと思われる。それも、Leigh Hunt の、過去の出来事を取り出しながら、現在について歌い上げるのだ、と思われる。つまり、Leigh Hunt の、「過去の出来事」というのは、

(What) though, ...

Kind Hunt was shut in prison, ...

と歌い定めるのである。これは、恐らくは、

たとえ、親切なハントが投獄されたとしても、

と詩人 Keats は歌うのだろう。

投獄されたとしても、

優しいハントは今でも雲雀のように自由の人である

とでも歌うのではないか。しかも、これは、上記に既に指摘しておいたように、あの「Leigh Hunt の獄中生活」を明示するのではあるまいか。

重要なのは、ここにいう、What though ... である。思うに、これは、接続詞 what though ... である、ということである。これは、「たとえ……としても」という接続詞である。これが、筆者の解釈である。これを、大和訳を見ると、「優しいハントが牢に閉じこめられたとて何だ」と読む。また、出口保夫訳『キーツ全詩集 1』を見ると、「心優しいハントが牢獄につながれたとて、一体なんだ。」と読む。これは、可笑しいと思う。というのは、大和も、出口もともに、接続詞 What though ... を、疑問文 What though ... (?) と読んでいるからである。例えば、What though I am poor? (「貧乏だってなんだ」という風に、である。両者とも、勘違いしているのではあるまいか。誤読と言い換えてもよい。

松浦は、これを、

What though . . . 「……しても何のその、……してもかまうものか」一般に？がつく。18世紀的な語法である。この場合、キーツは2行目のyetと相関的に用いている。

と注釈する。これは、上記の両者と同じ意見である。また、松浦のいう、18世紀的な語法である、というのに、驚かされる。そして、松浦は、それに続けて、Finneyの言葉を引用する。曰く、

Cf. The diction of the sonnet—in such phrases, for instance, as “what though,” “flatter’d state,” “immortal spirit,” “sky-searching lark,” “elate,” “field of air,” “his fame impair,” and “wretched crew”—represents the style of eighteenth-century adaptations of Miltonic diction. (Finney: *Keats*, p. 57)

と言及する。Finneyが指摘する、上記の語句は、18世紀的な語法であるが、しかし、よく読むと、Finneyは、松浦のいう、What though . . . (?) という、一般に、疑問符？がつく、という説明をしていない、のではないか。また、上記の英文を読む限り、疑問符？が付かないのが、18世紀的な語法である、とFinneyはどこにも説明していないからである。

しかし、よく見ると、詩人Keatsは、「最初の4行」の世界の、どこにも疑問符を用いていない。このように、どこにも疑問符を用いていない、のであるから、ここは矢張り、接続詞として、

What though, . . .

Kind Hunt was shut in prison, . . .

. . . (he has) been as free

As the sky- (searching) lark, . . .

と味読すべきであろうか、と思う。これが、筆者の解釈である。御覧のように、前半2行は、接続詞what though SVである。そして、後ろに主文、即ち、後半2行が続き、文と文とを接続する。これを、従位接続詞という。この、接続詞What though . . . (= even if . . .) を踏まえてみると、これは、

たとえ親切なハントが投獄されたとしても、

振り返ると彼は雲雀のように自由の人であったのに。

と歌うのではあるまいか。これが、「最初の4行」における、詩人Keatsの、Keatsならではの、重要なテーマの1つである。これが、筆者の解釈である。

しかし、松浦もまた、「ハントは投獄された、しかしそれが何だ、」と読む。これは、上記の、2者、即ち、大和訳と、出口訳と同じ読み方である。残念である。

さらに、それに加えて、詩人Keatsの、もう1つの大事な詩想がある。それは、

(. . .) and (he has been) as elate

(as the sky-lark).

と規定する。ここにいる、形容詞elateは、文語で、形容詞elatedという意味である。この、elateという語は、中英語で、*elat*といい、「誇った」「有頂天の」という意味を持つ。これは、もと、ラテン語の*elatus*といい、「誇っている」「氣力を引きたてられる」という原義を有するという。これは、ラテン語の*efferre*「高くする」の過去分詞であるという。

詩人Keatsは、ここにも、現在完了形を使って、

He has been as elate as . . . ,

と歌うのである。思うに、詩人 Keats は、

振り返れば親切なるハントは雲雀のように意気揚々としていた。

と歌うのではないか。これは、春の鳥、雲雀の快活さを明示する詩興であると思われる。それも、一般語の形容詞 *elated* を用いなくて、その文語である、*elate* を使用するのも妙味である。この文語が、一層の詩的イメージを高めているのも味わい深い。この文語 *elate* を、Finney は、先述の、Milton 的な語法である、と指摘するのも知れない。

そして、詩人 Keats は、それに続けて、

. . . , for showing truth to flattered state,

と歌う。まず、A shows truth to state という骨格の文の意味をとらえてみよう。これは、恐らくは、A という誰かが

議会に真実を示す、

という意味だろう。ここにいう、主語 A は、勿論、2 行目の、Kind Hunt その人であると思う。つまり、詩人 Keats は、

親切なるハントは議会に真実を示すために、

とても歌うのではあるまいか。厄介なのは、名詞 *state* である。大文字で *State* と歌うのであれば、(1)特に、主権を有する、国、国家、と読める。また、(2)特に、教会 (Church) に対して、主権者・統治者としての、国家、と読めるのであるが、しかし、ここに詩人 Keats は、わざわざ、小文字で、*state* と定める。

思うに、詩人 Keats は、この、小文字 *state* に託して、特権階級の人々を明示するのではあるまいか。それは、無論、支配層でも、あるいは議会でもよい。既に廃語となった、貴族でも、王座・玉座でもよいのだが、しかし、筆者は、これを、あえて、議会、と読む。しかも、詩人 Keats は、これを、より具体的に、

. . . for showing truth to flattered state,

と規定するからである。出口訳を見ると、この、*flattered state* を、「虚飾に満ちた国家」と読む。ここにいう、*flatter* という語は、中英語で、*flatteren* といい、「浮ぶ」「羽ばたきする」「こびへつらう」という意味を持つ。古英語では、*floterian* といい、「浮ぶ」「羽ばたきする」という意味であったという。これは、もと、古フランス語の、*flatter* から派生した語であって、「こびへつらう」という原義を有するという。字義は、「なでる」「愛撫する」という。これは、恐らくは、フランス語の、*flat* (*flat*) の強い影響を受けたのではないかという。動詞 *flatter* が、*flatter* - *flattered* - *flattered* と変化する。詩人 Keats は、その、3 行目の、過去分詞 *flattered* を用いる。そして、詩人 Keats は、それを、ここに形容詞 *flattered* として、次の名詞 *state* を説明するのである。

思うに、詩人 Keats は、先輩詩人 Leigh Hunt の語調をかりて、

親切なるハントが、こびへつらう議会に対して真実を示すために

と歌い上げるのではないか。大和訳を見ると、「おもねられた尊厳の人に真実を見せつけたので」と読む。また、松浦は、「諂える世に真実 (まこと) しめした (心やさしきハント)」と読む。大和は、名詞 *state* を、「尊厳の人」と見る。また、松浦は、それを、「世」と読むのだ。

想起するのは、上記に既に指摘しておいた、Leigh Huntが当時の特権階級の腐敗や、お世辞を暴露した、という論説である。当時、Leigh Huntは、議会の、保守党政策の誤りや、偽りなどを攻撃するのだ。さらに、当時の、新聞雑誌の無主義無節操を指摘してやまない、社会改革者Leigh Huntを称える、詩人Keatsなのである。Leigh Hunt自身が、そのために、投獄されるという、身の上自体もまた当時の「議会で真実を示す」行動そのものとして、詩人Keatsは声高く歌うのである、というのが筆者の解釈である。

当時の、社会改革者Leigh Huntは、重複するが、お世辞や、おだてや、こびへつらいなどが罷り通る議会を暴露するのである。そして、とうとう、Leigh Huntが、当時の摂政皇太子に筆鋒をむけたことは、既に上記に指摘しておいた通りである。for という前置詞のもつ基本イメージは、「向かって」である。「向かって」から、そちらに意識が引きつけられている、文学少年Keatsの感じを、その気持ちを是非とも味読したいものである。

出口訳を見ると、「虚飾に満ちた国家に 真実を見せるために」と読む。詩人Keatsは、for A to Bという風に、2つの前置詞for, toを使用するのだ。前置詞toは、矢印「→」の感じが、toの意味を一番よく表わしているという。漢字で表わせば「対」、ひらがなでは、「へ・に」となる、という基本イメージが重要である。前置詞toは、方向だけでなく、必ず到着することが前提であるという。To 不定詞のtoであろうとも、前置詞toと同じであるからだ。

それに対して、前置詞forは、言い換えると、何かに向かうこと自体が重要である。そして、その気持ちを大切に、という基本イメージを身につけよう。ただし、forが示すのは、方向だけであり、到着することまでは含まない、ということだ。前置詞については、この拙文の結論で詳しく後述したい。

思うに、詩人Keatsは、

たとえ親かなハントが、こびへつらう議会で真実を示すために、
投獄されたとしても、振り返ると彼は雲雀のように自由の人で
あったし、また、雲雀のように意気揚々としていました。

と声高らかに歌い上げるのではあるまいか。そして、詩人Keatsは、さらに、

In his immortal spirit,

と規定する。前置詞inは、厄介である。この前置詞のもつ基本イメージは「(立体的に) 囲まれている感じ」である。しかし、実際に、完全に囲まれていなくても、よいという。

思うに、詩人Keatsは、まず、

親かなハントは自分の霊という枠の中で、
と歌うのではないか。しかも、詩人Keatsは、

親かなハントは自分の不滅の霊の枠の中で、
と歌うのだらう。「自分の不滅の霊の枠の中に、親かなハントがどっぷり浸かっている」といった感じを、この前置詞inに託して、味読したいものである。このように、前置詞inには、実際にはない「内部感覚」が重要である。

松浦訳を見ると、「不滅の魂(の彼は)」と読む。詩人Keatsが歌う前置詞inに託された、Leigh Huntの「内部感覚」が視覚的に読めない。大和訳を見ると、「彼は不

滅の魂のなかでは」と読む。

名詞 spirit もまた、厄介である。類似語に、soul があるからだ。先ず、両者の相違を見てみよう。名詞 soul は、肉体 (body) の対語である。肉体に生命と力を付与するものをいう。また、人間の本質的な部分で、永遠不滅のものをいうという。例えば、Our souls will live on when our bodies perish. (「肉体が減んでも魂は生きつづける。）」という風に、である。それに対して、名詞 spirit は、肉体を超えた次元での活動力としての精神、また、元来、肉体を備えていない存在も指すという。例えば、the Holy Spirit (or Ghost) (「聖霊」) とか、また、諺で、The spirit is willing but the flesh is weak. (「心ははやっても体がついてこない。)」という風に、である。

名詞 spirit という語は、もと、ラテン語の、*spiritus* から派生した語で、「息」という原義を有するという。これは、もと、動詞で、*spirare* といい、「息をする」よりの発達語であるという。「呼吸する」が、原義であるという。

生命力の根源は息の中にあるという考え方は面白い。それも、神によって吹き込まれた生命の息吹である。この霊力が、雲雀のように、Leigh Hunt を鼓舞させたり、また、Leigh Hunt を生き生きさせているという見方は、詩人 Keats の、Keats らしい、Keats 独自の斬新な Leigh Hunt 観である。

彼の不滅の霊に於ける、親切なハントは雲雀のように自由の

人であったし、また、雲雀のように意気揚々としていました。

と文学少年 Keats は歌うのだろうか。出口訳を見ると、「だが 大空を駆ける雲雀のように、 / かれの永遠の魂は 自由澁刺たるものだ。」と読む。気掛かりなのは、詩人 Keats が歌う、現在完了形である。「歴史的に振り返って」いる感じが、この、現在完了形に託されているからである。

思うに、詩人 Keats は、

..., yet has he,

In his immortal spirit, been as free

As the sky-searching lark, and as elate.

と歌い定める。ここにいう、yet は、重要である。理由は、What though で始まる従属節との、対照をさらに強めるために、接続詞 yet が主節に用いられているからである。この、接続詞 yet は、無論、but, however よりも対比の意味が強いからである。例えば、Although she had not eaten for days, yet she looked healthy. (「彼女は何日も食べていなかったとしても、それでも健康そうに見えた。)」という風に、使われる接続詞 yet である。

しかし、松浦は、上記の注釈の中で、

この場合、キーツは2行目の yet と相関的に用いている。

という。この場合というのは、What though ... (?) を疑問文であると見ている場合である。疑問文と、yet とが相関的に、というのは、やはり、可笑しい。接続詞 what though ... と、yet とが相関的に用いられている、のであれば、理解できる。上記の、例文 Although she had not eaten for days, yet she looked healthy. の示す通りである。

その上、注目したいのが、詩人 Keats は、2行に分けて、

What though ..., yet he has been as free as the sky-searching lark,

と先ず歌い、それに続けて、

What though . . . , yet he has been as elate as the sky-searching lark,
と歌うのが、この詩の特色である、とする解釈である。これを、松浦は、「彼は天がける雲雀のように自由で勇ましい。」と読むのである。大和訳を見ると、「大空を探るヒバリのように自由で、意気高らかだったのだ。」と読む。commaを用いて、詩人 Keats の、その詩的意図を工夫しているのである。松浦訳には、その詩的意図が見られない。がしかし、これも、一興であろう。

雲雀は雲雀でも、詩人 Keats の歌う、雲雀は、御覧のように、

the sky-searching lark

である。これは、どうも、詩人 Keats 自身の造語であるようだ。松浦は、

N. E. D. には skylarker = One who skylarks という語は見られるが、この語は見当たらない。キーツの coinage である。

Cf. 'sky-engendered, Son of mysteries.' (*Hyperion*, Book I, 310)

と注釈する。ここにいう、名詞 coinage とは、貨幣鑄造を踏まえた、「造語」という意味である。

これは、詩人 Keats の、Keats らしい、Keats 独自の「Leigh Hunt 観」である。動詞 search という語は、中英語で、*serchen*, *cerchen* といい、これは、古フランス語の、*cerchier* からの派生語であるという。これは、もと、後期ラテン語の、*circare* から派生した語で、「広まる」という原義を有するという。ラテン語の、*circus* 「円」から発達した語であるという。

これは、search - searched - searched - searching と変化し、詩人 Keats が使用するの、4 番目の、現在分詞 searching である。これは、形容詞 searching として、ここに歌われているのである。出口訳を見ると、「大空を駆ける雲雀」と読む。駆けるとは、はやく走る、という意味だろうか。念のために、駆ける、の駆という語は、旧字体の区が音を表わし、あつめるという意味の語源、聚（しゅう）からきているという。馬が走るときは、足を前後に大きくまたぎ、また、四足を集めることから、かけるという意味となったという。面白い。「後ろから駆けて来た者がある」という風に、使われる。松浦訳を見ると、「天がける」と読む。平仮名を用いるのだ。

松浦は、この、sky-searching について、「空を求めゆく」と読む。そして、大和訳を見ると、「大空を探る」と読む。

探とは、その右側は火の通る穴、えんとつ、の意味を示すという。穴と火の粉と手から成り、手が音を表わす。手を加えて、手の届かぬ奥深い、という意味となり、ひいては、奥深い所を手でさぐるという意味となったという。これも、意味深い語である。大和は、この探に託して、地上の様子をうかがいさぐる、といったイメージをもつヒバリを明示するのではあるまいか。

この、形容詞 searching は、ご存知のように、「[目つきなどが] 探るような」とか、「鋭い」といった意味をもつ形容詞である。それも、詩人 Keats のうたうのは「名詞 + 現在分詞 + 名詞」の結びつきになっている形容詞である。これは、あとの名詞 lark を形容するのだ。例えば、a hair-raising scene（「身の毛もよだつ光景」）とか、あるいは、a law-abiding citizen（「法律を守る市民」）といった風に、である。

このような複合形容詞は、辞書にも載っているが、しかし、小説には、また、実

用英語には無数といってよいほど、この形式の造語が多い。その1つの例は、詩人 Keats の歌う The sky-searching lark である。これを、恐らくは、「大空を搜索する雲雀」と読むのも楽しい。

なにはともあれ、詩人 Keats が歌う、

The sky-searching lark

とは、非常に面白い歌い方である。当時の、社会改革者としての、Leigh Hunt が的確に表現・表白された、見事な表現である。これも、また、詩人 Keats の斬新な「Leigh Hunt 観」である。

筆者は、ここを、

大空を翔る雲雀

と読みたい。この、翔は、右側の、羊の転音が音を表わし、さまよう、という意味の、佯（しょう）からきているという。ぐるぐると飛びめぐる、という意味であるという。面白い。理由は、動詞 search は、もと、後期ラテン語の、*circare* からの派生語であって、go around という原義を有するからである。これは、*circum* から発達した語で、round about という原義を有するからである。この、ぐるぐると動き回る、が原義である動詞 search が、変化して、現在分詞 searching、即ち、形容詞 searching として、ここに詩人 Keats は歌い上げるからである。

伝説によると、ヒバリはその昔、美しい小さな目の持主であった。ヒキガエルはその昔、醜い大きな目の持主であった。それがいつの間にか、両者の目を取り替えられたという。この、伝説を下敷にして、William Shakespeare (1564 - 1616) は、『ロミオとジュリエット』(Romeo and Juliet) の第三幕第五場の「ジュリエットの部屋」(Juliet's Chamber) の中で、

Jul. . .

It is the lark that sings so out of tune,
Straining harsh discords and unpleasing sharps.
Some say the lark makes sweet division;
This doth not so, for she divideth us:
Some say the lark and loathed toad change eyes;
O! now I would they had chang'd voices too,
Since arm from arm that voice doth us affray,

という。これは、Juliet の台詞である。これは、イギリス人の「雲雀」に寄せるイメージの代表である。「あんな調子外れに歌い、耳障りな不協音と / 不快な鋭い音を出したのは、雲雀ですから。」と歌う。そして、「雲雀は甘美な調子で歌うという人もあるけれども、/ 今のはそうじゃありませんわね、私たちを別れさせるんですもの。」と歌う。男女の離別に、雲雀が登場するのは、面白い。さらに、Shakespeare は、「雲雀といやなひきがえるとは、眼を取り換えっこしたという人もあるけれども、/ ああ、そんなら、声も一緒に取り換えたらよかったんだわ」と歌う。その上、Shakespeare は、「あの声は私たちをびっくりさせて、腕から腕をはなさせ / あなたを呼び覚まして、……」と歌うのである。

このように、「雲雀」と「蟾蛙」(the loathed toad) との、対象は意味深い。これは、蟾蛙 (toad) であって、蛙 (frog) でないことに、注意しよう。理由は、イングラ

ドで、豊饒の蛙 (frog) の有する価値が逆転すると、いまわしい蟾蛙になる (the infernal inversion of Frog)、と語り継がれているからである。蟾蛙は、悪魔を表わし、魔女 (witch) と関連する生き物であるからである。想起するのが、定かではないが、確か、Shakespeare 作『マクベス』(Macbeth) の中の、蟾蛙は、「魔女の煮物の材料」(a part of the witches' brew) である、という台詞であったかと思われる。

Shakespeare 作『オセロー』(Othello the Moor of Venice) の第三幕第三場に、

... O curse of marriage!

That we can call these delicate creatures ours,

And not their appetites. I had rather be toad,

And live upon the vapour of a dungeon,

Than keep a corner in the thing I love

For others' uses.

という、オセローの台詞がある。「おお何たる結婚の呪い！ / 可愛い女どもが自分ののだと言葉ではいえても / 彼女らの気持ちはままならぬ！」とオセローが呟く。そして、「いっそ蟾蛙にでもなって、 / どこかの地下牢の蒸気でも吸って生きていた方がましだ、」と嘆きつつ、ここに、蟾蛙を登場させる。さらに、「愛するものの片隅だけをわがものにして、他はすべて / 他人用だなんて！」とオセローは嘆息する。ここにいう、蟾蛙は、無論、伝統的に、最も忌むべきものとして、また、最も嫌われるものとしての生き物である。これは、感情の欠如をイメージする蟾蛙である。後日、稿を改めて、「西洋文化に現れた蛙のイメージについて」を論述してみたい。

なにはともあれ、ヒバリは、(1)夜の暗闇をイメージする鳥フクロウに対し、また、(2)夜歌う鳥ナイチンゲールに対して、夜明けと昼をイメージする鳥である。例えば、前者(1)について、Shakespeare の『シンベリン』(Cymbeline) 第三幕第六場に、

The night to the owl and morn to the lark less welcome.

という、Arviragun の台詞がある。また、後者(2)については、Shakespeare 作『ロミオとジュリエット』(Romeo and Juliet) 第三幕第五場の「ジュリエットの部屋」の中で、

Jul. Wilt thou be gone? It is not yet near day:

It was the nightingale, and not the lark,

That pierc'd the fearful hollow of thine ear;

Nightly she sings on yon pomegranate tree:

Believe me, love, it was the nightingale.

Rom. It was the lark, the herald of the morn,

No nightingale: look, love, what envious streaks

Do lace the severing clouds in yonder east:

という、Juliet と Romeo とが交わす台詞である。「今は、朝の先駆の雲雀で、 / 夜鶯じゃない。」といって、Romeo が、恋人 Juliet と別れるのだ。

このように、上記で紹介しておいた「フクロウが夜空を、ヒバリが朝を歓迎する……」という Arviragun の台詞もまた、有名である。同じ『シンベリン』第二幕第三場に、楽師たちが登場して、歌をうたう。

Hark! Hark! The lark at heaven's gate sings,
 And Phoebus' gins arise,
 His steeds to water at those springs
 On chalic'd flowers that lies;
 And winking Mary-buds begin
 To ope their golden eyes:
 With every thing that pretty is,
 My lady sweet, arise:

Arise, arise!

と合唱する。前半は、特に重要である。「東の空に高らかにさえずるヒバリをお聞きなさい」と歌い、そして、「お日様もうのぼってます」と歌う。さらに、「燃える車を引く馬は花杯の朝露で / 喉の渴きを癒してます。」と歌うからである。ここにいる、Phoebus /fi:bəs/というのは、『ギリシャ神話』に登場する、太陽神 (The sun god) としての、Apollo の名である。別に、Phoebus Apollo ともいう。

楽士たちが歌うのは、「ヒバリと天空」との関係を示していて、なによりも、快活で大胆さを明示するヒバリである。

Geoffrey Chaucer (1340 ? - 1400) は、『キャンタベリー物語』(*The Canterbury Tales*) 中の「騎士の話」("The Knight's Tale") の中で、

The busy lark, the messenger of day,
 Sings salutation to the morning grey,
 And fiery Phoebus rising up so bright
 Sets all the Orient laughing with the lights,

と語る。「夜明けの使者であるひばりは、いそがしそうにさえずって」と歌う。ここにも、太陽神 Phoebus が登場する。また、Chaucer は、同上に、

That Sunday night ere day began to spring
 There was a lark which Palamon heard sing
 (Although two hours before the day came on,
 Yet the lark sang, and so did Palamon).

と語る。ここにいる、Palamon とは、牢屋の塔の中で、身請けの黄金も甲斐なく、獄窓に呻吟する、不幸な捕虜の身の上である。さらに、Chaucer は、このような「雲雀」のイメージを下敷きにして、「仔ヒツジとともに寝て、ヒバリとともに起きよ」と歌うのだ。

これは、のちに、諺 (If the sky [fall] falls, we shall catch larks.) となり、イギリス人がよく口にする。これは活動を明示するヒバリである。

ロマン派の詩人 William Wordsworth (1770 - 1850) には、ヒバリに寄せる詩が二篇ある。先輩詩人 Wordsworth は、「汝の歌には崇高な喜びがある」(and joy divine / In that song of thine;) と歌うのが、『雲雀に寄せて』("To a Skylark. 'Up with me!'") と題する一篇である。曰く、

I have walked through wildernesses dreary,
 And to-day my heart is weary;
 Had I now the wings of a Faery,

Up to thee would I fly.
There is madness about thee, and joy divine
In that song of thine;
Left me, guide me, high and high
To thy banqueting place in the sky.

と歌う。これは、四連から成る短詩の中の、第二連の世界である。そして、詩人 Wordsworth は、それに続けて、

Joyous as morning,
Thou art laughing and scorning;
Thou hast a nest for thy love and thy rest,
And, though little troubled with sloth,
Drunken Lark! Thou wouldst be loth
To be such a traveler as I.
Happy, happy Liver,
With a soul as strong as a mountain river
Pouring out praise to the almighty Giver,
Joy and jollity be with us both!

と歌い続ける。「幸福な、幸福な鳥よ」と歌い、「汝は谷川のやうな強い霊で / 神への讃歌をそそぎ出す、」と歌う。そして、「歓喜と遊樂は、われら二人にあれ!」と歌うのが、第三連の世界である。雲雀と、詩人 Wordsworth の魂とが一体化されているのも、絶妙である。

さらに、詩人 Wordsworth は、それに続けて、

Alas! my journey, rugged and uneven,
Through prickly moors or dusty ways must wind;
But hearing thee, or others of thy kind,
As full of gladness and as free of heaven,
I, with my fate contented, will plod on,
And hope for higher raptures, when life's day is done.

と歌い納める。詩人 Wordsworth は、御覧のように、「飲びに充ち、空のやうに自由に」と歌い上げるのである。このように、天上の雲雀に対して、地上の詩人 Wordsworth が「対」となって、歌われているのが、この詩興の妙味でもある。

また、詩人 Wordsworth が「天の伶人! 空の巡礼!」と歌うのは、2つ目の「雲雀に寄せて」(“To a Skylark. ‘Ethereal minstrel!’”) という短詩である。これは、6行を一連として、二連から成る一篇がある。

Ethereal minstrel! Pilgrim of the sky!
Dost thou despise the earth where cares abound?
Or, while the wings aspire, are heart and eye
Both with thy nest upon the dewy ground?
Thy nest which thou canst drop into at will,
Those quivering wings composed, that music still!

Leave to the nightingale her shady wood;
 A privacy of glorious light is thine;
 Whence thou dost pour upon the world a flood
 Of harmony, with instinct more divine;
 Type of the wise who soar, but never roam;
 True to the kindred points of Heaven and Home!

と歌う。第一連の、形容詞 *ethereal*/iθiəriəl/とは、Cobuild 版を見ると、If you describe someone or something as *ethereal*, you mean that they have a delicate beauty; a formal use.と説明する。ここにいう、a delicate beautyが、重要である。「この世のものとも思えない美しさ」を意味する。また、名詞 *minstrel*/*minstrəl*/とは、In medieval times, a minstrel was a singer and musician who traveled around and performed for noble families.と説明する。これは、中世時代の、音楽家で、旅を続けながらその地方・地方の貴族のために演奏するという。詩人 Wordsworth は、雲雀を、「この世のものとも思えない美しい音楽家」と賛美するのである。

そして、詩人 Wordsworth は、それに続けて、「暗い森は夜鶯にゆだねよ、」と歌う。そして、「光り輝く空こそ汝の棲家、/ そこから神々しい歌声で/ 調和の流れを溢れるばかりこの世に注ぐ。」と歌うのだ。素晴らしい。そして、詩人 Wordsworth は、厳粛に、「天と地の二つに身を置く汝こそは / 高く飛べど、さ迷はぬ賢人の姿!」と歌い納めるのも、絶境である。重要なのは、この、第二連の「高く飛べど、さ迷はぬ賢人の姿」という世界である。ここに、雲雀は、「知恵」をイメージするからである。

このように、詩人 Wordsworth にとって、ヒバリは「崇高な喜びの鳥」であり、「自由に空を飛ぶ鳥」であり、「天の伶人」であり、「空の巡礼」であり、「賢人の鳥」なのである。

同じロマン派の詩人 Percy Bysshe Shelley (1792 – 1822) は、「ヒバリに寄せて」(“To a skylark”) と題して、5行を一連として、二十一連から成る一篇がある。

Hail to thee, blithe Spirit!
 Bird thou never wert,
 That from Heaven, or near it,
 Pourest thy full heart
 In profuse strains of unpremeditated art.

と歌いだす。これは、第一連の世界である。「ようこそ、快活な霊よ」と歌い始める。そして、詩人 Shelley は、

Higher still and higher
 From the earth thou springest
 Like a cloud of fire;
 The blue deep thou wingest,

And singing still dost soar, and soaring ever singest.

と歌う。これは、第二連の世界である。「なおも高く、高く、/ 一片の火の雲の如く、/ 地上から飛びあがり、/ 青い空の海をかける。」と歌う。そして、詩人 Shelley は、荘厳に、「歌いつつなおのぼり、のぼりつつ歌いつづける。」と歌うのである。

重要なのは、第一連の5行目の、“In profuse strains of unpremeditated art”の世界である。佐藤は、「あふれる心をそそぎ出している。」と読む。また、上田は、「天来のゆたかな歌声をふりまく」と読む。これは、重複するが、神々しい歓喜につき動かされて、否応もなく、上昇する雲雀、即ち、霊を称えた詩境であるからだ。これは、「天与の芸」という。

同時代のロマン派詩人 William Blake (1757 – 1827) が、雲雀は、“the first bird to sing”であるから、“visionary Inspiration”であるという。これは、「朝、他の鳥に先駆けて鳴く」ことから、「詩的靈感」の鳥であるという。想起するのが、Shakespeare 作『リア王』(King Lear) 第三幕第四場の中の、

... served the lust of my mistress's heart, and did the act of darkness with her; ...
という、Edgar の台詞である。「奥様の欲望を満たしてあげて暗いこともする。」という台詞の示すとおり、彼らにとって、暗闇は愛か、犯罪の時間である。「暗いこともした」と同じく、朝の愛の時間であるという。雲雀は、愛の鳥を表わすというのだ。

この、Shakespeare のイメージが、上記に既に紹介しておいた、『ロミオとジュリエット』の、朝の愛の鳥雲雀に対して、夜の愛の鳥夜鶯が対象となる、というのである。

このように、ヒバリはイギリス文学によく登場する。先輩詩人たちのヒバリに寄せるイメージを下敷にして、文学少年 Keats は、自由主義者 Leigh Hunt の霊を、ヒバリに託して歌うのである。しかし、ヒバリはヒバリでも、詩人 Keats の歌う雲雀は、重複するが、

the sky-searching lark
である。これは、恐らくは、

大空を翔る雲雀
と歌うのではないか。これは、繰り返すが、複合形容詞を造語した雲雀である。それも、

鋭い目で大空を翔る雲雀
と規定するのではないか。これは、文学少年 Keats の斬新な着想である。
思うに、文学少年 Keats は、声高らかに、

たとえ、こびへつらう議会に対して真実を示さんがために、
親切なるハントが投獄されたとしても、然し振り返って見ると、
彼の不滅の霊において、鋭い目で大空を翔る雲雀のように、
ハントは自由の人であり、また、意気揚々としていました。

と歌い上げるのではあるまいか。これが、「最初の4行」(the first quatrain)の世界である。漢詩の、「起承転結」の「起」の世界である。社会改革者 Leigh Hunt を、「鋭い目で大空を翔る雲雀」に譬えたのは、文学少年 Keats の斬新な着想であり、お手柄でもある。

出口訳を見ると、「虚飾に満ちた国家に 真実を見せるために、 / 心優しいハントが牢獄につながれたとて 一体なんだ。 / だが 大空を駆ける雲雀のように、 /

かれの永遠の魂は 自由澁刺たるものだ。」と読む。繰り返すが、出口は、What though . . . を、疑問文であると読む。英文の疑問文であれば、必ず、疑問符 ? を用いて、What though . . . ? と歌うのであるが、しかし、原詩には、疑問符 (?) がない。それなのに、出口は、「一体なんだ。」と読む。重複するが、松浦もまた、出口と同じように、「しかしそれは何だ、」と読むのだ。大和訳を見ても、異口同音に、「閉じ込められたとて何だ。」と読むのである。

疑問文 What though . . . ? は、What if . . . ? の、文語である。これは、上記の3人のように、「……としてもそれはなんだ？」と読む構文ではなく、筆者は、この、What though を、接続詞であると読むものである。ここは、やはり、What though (=Even though) として、「たとえ……としても」と読みたい。

Even though . . . と、even if . . . という使い方がある。両者は、ともに、どちらも「たとえ～でも」と訳される場合が多い。区別のついていない英語学習者が多い、という。その意味するところは、まったく異なるのである。

Even if は、if を強めたもので、条件文でよく使われるという。例えば、She will have a second chance, even if she fails the exam. (「今度の試験に落ちても彼女はまたチャンスがありますよ。」) という風に、使われる。がしかし、これに対して、even though は、次のように、although を強めたものであるという。例えば、My cough has not got better, even though I have been taking the medicine. (「薬を飲み続けているのに私の咳は治らない。」) という風に、である。

前者 even if は、条件文で用いられることから、非現実的な状況や、起こるかどうかわかぬ状況を表わすのに使用されるという。それに対して、後者の even though は、現実的な、実際に起こっている状況を表わすのに用いられるという。そして、Christopher Barnard は著書『英文法の意外な穴』(53 Essays for Curious People) の中で、even though は、次のように書き換えることができるという。いずれも、even though より文章的な表現になるという。

Even though = despite the fact that
in spite of the fact that
not with standing the fact that

であるという。これは、意外な英文法の穴場である。

なにはともあれ、even though は、現実的な、実際に起こっている状況、即ち、こびへつらう状況を明示することに、注意しよう。

日本における、雲雀は、別に、告天子、ともいう。スズメ目ヒバリ科の小鳥で、スズメよりやや大きくて、背面は黄褐色の地に、黒褐色の斑点がある。腹部は白く、後趾の爪は非常に長い。日本各地の畑地や、草原などに、巣をつくり、空中高くのぼって、さえずる。籠鳥として、古くから飼育される。

想起するのは、『万葉集』十九巻の、

うらうらに照れる春日に比婆里あがり心かなしもひとりしおもへば
という一首である。雲雀は、日晴(ひはる)の、意味であるという。空晴れば、飛鳴して、雲の上に昇るという。別に、日腫鳥(ひはれどり)ともいう。また、別に、ひめひなどり、ともいう。『日本釈名』の「鳥類」の中に、

告天子、ひばりは日のはれたる時、そらに高くのぼりて、なく鳥なり、ひはる

也、雨天にはのほらず
という。『倭名抄』には、「雲雀、比波里」と記されている。また、『本草和名』には、「雲雀、比波利」とある。『古事記』の「下（仁徳）」に、

比婆理は、天に翔る、たかゆくや、はやぶさわけ、ヒハ取らさね
と明記される。

重複するが、雲雀 lark は、ヨーロッパ・アジアでは、skylark、アメリカでは、meadowlark（「マキバドリ」）を主に指すという。夜明けを告げる春の鳥で、快活・知恵の象徴であるという。その鳴き声は、teevo, cheevo, cheevio, chee であるという。名詞 lark は、中英語で、larke, laverke という。これは、古英語の、laferce, léwerce からの発達語であるという。この古英語は、西ゲルマン語の、lararikon からの発達語ではないかという。今のドイツ語の Lerche と、また、オランダ語の leeuwewerik と同じ語源を有するという。

そして、文学少年 Keats は、それに続けて、厳格に、

Minion of grandeur, think you he did wait?
Think you he naught but prison walls did see,
Till, so unwilling, thou unturn'dst the key?
Ah, no! far happier, nobler was his fate.

と歌うのである。ここにいう、人称代名詞 you というのは、無論、1 行目の前半の、minion of grandeur（「威厳のある役人」）をさす。大和訳を見ると、「豪奢の手先め!」と読む。また、松浦は、「威光の寵児よ!」と読む。

ここにいう、人称代名詞 he というのは、論客 Leigh Hunt その人を指す。さらに、人称代名詞 thou というのは、you の古語である。文学少年 Keats が歌う、think you he did wait? を、大和訳を見ると、「（手先め!）汝は彼がただ待ったと思うか?」と読む。松浦は、それを、「（寵児よ!）彼が、がまんしたと思うのか、」と読む。大和は、この、you を、「汝は」と読む。松浦は、それを訳していない。2 行目の、you を、大和は、「（彼は牢獄の壁しか何もみなかったと）汝は思うか?」と読み、松浦はそれを、「（彼が牢獄〔ひとや〕の壁だけを見ていたと）思うのか、」と読むのだ。即ち、大和は、これらの、you を「汝は」と読み、松浦はそれを、あえて省略するのである。

そして、問題の、3 行目の、thou を、大和は「汝が（いやいやながら鍵を逆にまわすまで）」と読み、松浦は、それを「おまえが（しぶしぶ鍵をあげるまで）」と読む。大和は、この、2 種類の人称代名詞、you, thou を、「汝は」と読み、松浦は、前者の you を訳さず、後者の thou を、「おまえが」と読むのである。

しかし、御覧のように、詩人 Keats は、ここに、第二人称代名詞、即ち、you と、thou をこのように明確に使い分けている。思うに、文学少年 Keats は、この人称代名詞 you と、thou との使い分けに託して、これもまた、Leigh Hunt 張りの口調の勢いに任せながらも、しかし、こわがって畏縮する文学少年 Keats を明示するのではないか。詩人 Keats が、思わず、この、thou に託して、怖気立っている感じを滲ませているのも、愉快である。

理由は、thou は格調の高い、宗教的な散文によく用いられる古語「貴方」である

からである。思うに、文学少年 Keats は、この、人称代名詞 *thou* に託して、詩人 Keats らしい、Keats ならではの優しい弱い心根を表白しているのも、また心楽しい限りである。

しかし、この、*you, thou* の人称代名詞の使い分けが声高く歌われているのにも関わらず、出口訳を見ると、それがすべて省略されているのだ。例えば、「かれが出獄をまっていたと (*you*) 思うか。」とか、また、「かれは 何も見るものがなかったと (*you*) 思うか。」とか、さらに、「心ならずとも、(*thou*) 牢獄の鍵が解かれるまで、」とか、という風に、である。

名詞 *minion* とは、文語で、「(権力者の) 手先」とか、「(君主の) 寵臣 (= 寵児)」という意味をもつ。軽蔑的に、警官は獄吏のことを、*the minions of the law*、という風に、である。このように軽蔑的に、また、おどけて用いる語 *minion* である。この、*minion* という語は、中期フランス語の、*mignon* から発達した語である。「かわいらしい」という意味を持つ。これは、もと、古期フランス語の、*mignot* といい、定かではないが、「きれいな」に相当する原義を有するという。これは、形容詞 *minion* の古語として、「きゃしゃな、こざれいな、優美な」という意味に伝えられているようであるが、しかし、名詞 *minion* は、詩人 Keats の、この一篇においては、軽蔑的に、あるいは、おどけて、権力者の手先とか、取り巻き、という意味であると思われる。

Grandeur というのは、(1)「(精神の) 崇高さ、偉大さ」とか、(2)「(風貌や、態度のもつ) 威厳」といった意味をもつ名詞である。詩人 Keats が歌うのは、後者(2)の意味であろうかと思われる。この、*grandeur* は、もと、古期フランス語の、*grand* から発達した語であるという。

思うに、詩人 Keats が歌う、

Minion of grandeur

には、2つの解釈がある。(1)「偉大なる寵臣」と読むか、それとも、(2)「威厳のある獄吏」と読むか、である。前者は、当時の、*Prince of Wales* である、George 殿下に、特別にかわいがられる貴族議員や、こびへつらう国会議員を明示する。後者は、その貴族議員や国会議員にかわいがられ、こびへつらう監獄の役人をイメージする。これが、直接、囚人 Leigh Hunt を取り扱う役人である。思うに、文学少年 Keats は、前者を、Leigh Hunt の口調を真似て、*you* と呼びかけ、そして、後者を、改めて、*thou* と呼ぶのではあるまいか。これが、筆者の解釈である。

理由は、重複するが、表の意味でみると、権力者、即ち、George IV に追従し、その権力者の機嫌をとったり、その権力者にお世辞をいったり、諂ったりする輩、即ち、寵児のことであるからである。がしかし、また、同時に、裏の意味として、それ程の権力をもたないが、国民に対しては、依然威厳ある態度で国民を圧伏させるという輩、即ち、獄吏であるからである。このように、「裏表」のある議員や、役人を、文学青年 Keats は、Leigh Hunt と同様に、非常に軽蔑するのである。

囚人 Leigh Hunt の、出獄の許可を与えるのは、George IV であり、(1)その出獄の許可を伝えるのは、無論、George IV の寵臣どもである。そして、Leigh Hunt の監獄の扉のキーを開けるのは、(2)獄吏どもであることを思うに、詩人 Keats はここに、前者を *you* と歌い、後者を *thou* と歌い分けているのも、見事である。これは、当時

の、イギリス社会の組織図、即ち、上流・下層階級を露骨に表現した歌い方である。文学少年 Keats が、身分の低い獄吏、即ち、監獄の役人を、また、囚人を取り扱う役人を、*thou* という言葉で呼びかけているのも、Keats らしい思いやりの発露である。

しかし、詩人 Keats の、この、人称代名詞 *you, thou* の使い分けを意識して、さて、日本語に移しかえるとすると、なかなか厄介である。がしかし、詩興を踏まえてみると、*you* を、「あなた」より、「汝」と読み、*thou* を、「貴方」と読み分けられれば、よいのであるが、難題である。

理由は、汝という語は、女が音を表し、もと、川の名であり、対称代名詞に借用するという。これは、もと、女の意味であったが、おんたと区別するために、汝をなんじの意味に専用したという。汝は、我に対して、互いに通用する語であるからである。

松浦は、この、*minion of grandeur* について、

... The editor of the *Morning Post*, who had published the laudatory article describing the Prince Regent as “the glory of his People and Exciter of Desire” - “Adonais in loveliness” and more in the same strain. (*Selincourt*, p. 396)

と、E. de Selincourt が、1951 年に、Methuen から出版した『ジョン・キーツ詩集』(*The Poems of John Keats*) の中から引用し、紹介する。そして、松浦は、「*minion = favourite child*」であるという。

まず、松浦のいう、*favourite child* とは、何か、である。名詞 *child* は、古語で、「名門の子弟」「御曹子」「貴公子」という意味を持つ。この古語の意味を踏まえて、特定の場所や、時代、作用、影響を受けての、一種の崇拜者を明示するのであろうか。例えば、*a child of fortune* (「運命の寵児」) とか、あるいは、*a child of Revolution* (「革命児」) という風に、である。思うに、恐らくは、君主 George IV にこびへつらう輩を意味するのではあるまいか。これは、君主 George IV から見た、「寵臣」、即ち、「お気に入り」の家来をイメージする、名詞 *child* ではあるまいか。

形容詞 *favourite* は、「最もお気に入りの」という意味を持つ。名詞 *favourite* は、「(王・高官の) 寵臣」という意味を持つ。この場合、即ち、人の場合は軽蔑的に用いられるという。松浦は、「君主 George 四世の、最もお気に入りの寵臣」と注釈するのではあるまいか。

そして、松浦は、その「君主 George 四世の最もお気に入りの寵臣」とは、誰か、という。そこで、松浦は、De Selincourt の、上記の言葉を引用する。De Selincourt がいう、*Morning Post* というのは、1772 年に創刊され、1937 年、*Daily Telegraph* に併合されるまでは、古い歴史を有した新聞であった。1795 年、Daniel Stuart (1766 - 1846) の買収以来、隆盛になり、Sir J. Mackintosh や、当時のロマン派詩人たち、S. T. Coleridge (1772 - 1834)、それに、Robert Southey (1774 - 1843)、William Wordsworth、そして、Arthur Young (1741 - 1820) 等の寄稿を得て、文学史上重要になったという新聞である。

その新聞 *Morning Post* の編集者が、当時の摂政皇太子 (Prince Regent) を、「イギリス人民に栄光をもたらす者」として、また、「欲望を刺激する者」として、さらに、「女神 Aphrodite に愛された Adonais (adounis/)」に譬えて、美青年として、の賞賛

の記事を次から次へと掲げた、というのである。つまり、De Selincourt は、寵臣の一人に、この、*Morning Post* の編集者を挙げている、と読むのだ。

そして、文学少年 Keats は、厳肅に、

Minion of grandeur, think you he did wait?

と歌う。後半は、do you think he did wait? という疑問文である。名詞節の、(that) he did wait という did は、強調を示す、助動詞 do の過去形 did である。一般動詞 wait とともに用いる場合は、この、助動詞 did に、強勢を置くことに注意しよう。思うに、詩人 Keats は、

威厳のある寵児よ、汝はハントが本当に出獄を待ち望んでいたと思うかい？

と歌うのではあるまいか。前半の、Minion of grandeur の、前置詞 of は、思うに約 36 個ある前置詞の中でも一番厄介である。御覧のように、前置詞 of は、名詞 minion と、名詞 grandeur の接着剤のように使用されるという。A of B は、「A が B の要素を帯びている」というイメージが重要である。即ち、「寵臣が威厳を帯びている」といった意味合いである。

筆者は、これを、「威厳のある寵児よ」と読む。出口訳を見ると、「偉大なる寵児！」と読み、「かれが出獄を待っていたと思うか。」と読む。ここは、疑問文であるから、「思うか。」と読むのは、どうであろうか。無論、助詞「か」は、事柄に対する疑問を表現する。例えば、『古事記』の「中」に、「にひばり筑波を過ぎて幾夜か寝つる」とか、また、『万葉集』「十五卷」に、「吾妹子がいかに思へかぬば玉の一夜も落ちず夢にし見ゆる」という風に、である。

前者の「か」は、係助詞として、文中にあって係りとなり、文末の活用語を連体形で結ぶ「か」であるという。これは、「～だろうか」という疑問を表わすという。また、後者の「か」は、活用語の未然形その他、条件表現を受けて疑問を表わす「か」であるという。

また、助詞「か」は、自己の迷い・惑いをこめた詠嘆の感情を表現する。例えば、『万葉集』「一卷」に、「三輪山をしかも隠すか雲だにも情あらなき隠さふべしや」とか、また、『古今集』「春」に、「はかなくも散るはなごとにたぐふ心か」という風に、である。

筆者は、「思うかい？」と読みたい。助詞「かい」は、「か」も「い」も終助詞である。これは、軽く疑って問う語であるからである。例えば、会話で、疑問を表わす語として、「見たいか」という風に、である。そして、視覚的に、その疑問符 (?) の効用を示したいからである。大和訳を見ると、「思うか?」「思うか?」と読み、松浦は、「思うのか,」「思うのか,」と読む。三人三様の読みの相違が、面白い。

さらに、詩人 Keats は、それに続けて、

Think you he naught but prison walls did see,

と規定する。これも、前者と同じように、Do you think he did see naught but prison walls? と歌うのだろう。これは、

汝はハントが本当にただ牢獄の壁を眺めてばかり居たと思うかい？

と歌うのではないか。ここにいう、naught というのは、nothing の古語であり詩語である。nothing but というのは副詞で、「ただ……だけ」とか、「……にすぎない」といった意味を持つ。つまり、only に近い意味である。念のために、Cobuild 版を

見てみると、You use nothing but in front of a noun, an infinitive without 'to', or an '-ing' form to mean 'only'.と説明する。Onlyは、「ただ〜でしかない」という意味で、これは、言い換えると、“nothing but”の意味にちかいいという。がしかし、この、onlyは、「〜だけでしかない」で、「個」に限定されるという語感を有するという。

出口訳を見ると、「その壁のほかに (but) かれは 何も (naught) 見るものがなかったと思うか。」と読む。出口は、naught butを、Cobuild版の示す、onlyという意味ではなく、その文字通りに、読んでいるのである。大和訳を見ると、「牢獄の壁しか何も見なかった」と読む。松浦は、「牢獄の壁だけを見ていた」と読む。

しかも、詩人 Keats は、

Till, . . . , thou unturn'dst the key

と定める。ここにいう、人称代名詞 thou は、you の古語であることを、上記に既に指摘しておいた。勿論、この、「貴方」(thou) とは、Minion of grandeur を指す。詩境から見ると、この、thou は、獄吏を明示する感が大である。囚人 Leigh Hunt の牢獄の扉にキーを差し込み、扉を開けるのが、獄吏の役目であるからである。このことも、既に、先述しておいた。

接続詞 till は、「〜までずっと」という意味である。類似語の by は、「遅くとも〜までには」という意味である。この、「ずっと」と、「には」に力点を置いて頭に入れておこう。

また、until と、till の相違であるが、両者とも、「時間の終点」を決める語で、「〜までずっと」という意味である。その時点を境に事態が変わることを示すという。両者とも、意味の差異はないが、一般的に、アメリカでも、イギリスでも、前者の until が好まれるという。後者の till は、ややくだけた書き言葉であり、話し言葉であるともいう。

念のために、Cobuild 版を見てみると、In spoken English and informal written English, till is often used instead of until.と説明する。又、If something happens until a particular time, it happens during the period before that time and stops at that time.と説明する。

思うに、詩人 Keats は、言葉を改めて、

貴方は牢獄の扉のキーを開けるまでずっと

と歌い定めるのか。思うに、詩人 Keats は、この、接続詞 till に託して、それを境に、即ち、Leigh Hunt の出獄後、イギリス社会の事態の変化を明示しているのも、感動的である。このように、この接続詞 till は、重要である。

動詞 turn は、(物が) 回る、(物を) 回転させる、が基本義である。例えば、He turned the key in the lock. (「彼はかぎを錠に差し込んで回した。」) という風に、用いる。動詞 turn は、turn - turned - turned と変化する。2つ目の、過去形動詞 turned に、接頭辞 un- が付いて、その表わす行為と反対の行為、またはその行為をもとに戻すことを示すという接頭辞 un- である。がしかし、過去形動詞 turned は、よく見掛けるが、untuned という過去形動詞は、どうも、詩人 Keats の造語であるようだ。

そして、文学少年 Keats は、

so unwilling,

と定める。これは、恐らくは、

(if thou wert) so unwilling (to turn the key),

という意味であろうかと思われる。詩人 Keats が歌うのは、簡潔に、so unwilling, である。これは、分詞構文で、接続詞なしで文を接続するものである。同じ主語であれば、その主語を消すというのが、鉄則である。

この、人称代名詞 thou は、繰り返すが、you の古語で、無論、獄吏を指すのだと思われる。この、獄吏に対して、詩人 Keats は、「貴方」は、と歌うのである。これは、恐らくは、

貴方は彼の牢獄の扉を開けるのを到底好まないとしても、

といった意味であろうか。副詞 so は、口語で、very, very much という意味を持つ。がしかし、どの程度かを示す、はっきりした基準がないが、しかし、ただ程度が高いことを示す副詞 so であるという。副詞 very は、どちらかというに、溢れ出る自分の気持ちを表現するという。主観的に強める very であるのに対して、副詞 so は、その強いエネルギーを感じるという。飛び上がる感じの so である。

また、形容詞 unwilling には、2つの使い方がある。(1) 通常限定用法としての、「〈行為が〉気の進まない」「不本意な」という意味と、(2) 「人が～するのを好まない」「～する気がしない」という意味である。

前者は、例えば、He gave me unwilling permission to use his comb. (「彼はいやいやながら櫛を使わせてくれた。」) という風に、である。それに対して、後者は、例えば、She was unwilling to give any information. (「彼女は情報を提供するのをしぶった。」) という風に、である。思うに、詩人 Keats は、ここに、後者の、形容詞 unwilling を歌うのではあるまいか。

前者のそれでない理由は、限定用法 unwilling であれば、その後に名詞が必ず必要となるからである。がしかし、御覧のように、詩人 Keats は、その後に名詞を用いていないからである。

思うに、文学少年 Keats は、恐らくは、

貴方は到底好まないとしても、

とでも歌うのではないか。念のために、Cobuild 版を見てみると、If you are unwilling to do something, you do not want to do it and will not agree to do it. と説明する。出口訳を見ると、「心ならずとも」と読む。「とも」という助詞は有効である。理由は、これが、接続助詞であるからだ。これは、あることを仮定し、その後に、予想と反することが起きること（仮定逆接条件）を表わすもので、「たとえ～でも」という意味であるからである。

「とも」とは、文語で、動詞および動詞型助動詞の終止形、形容詞および形容詞型助動詞の連用形に（鎌倉時代以後は動詞・助動詞の連体形に）接続する。ただし、奈良時代の上一段活用動詞「見る」には「見」の形に接続したこともあるという助詞である。大和訳を見ると、「いやいやながら」と読む。この、「いやいや」というのは、「可否・嫌嫌」という意味である。

例えば、「いやいや絶対まちがいだ」という「いやいや」は、感動詞で、このように、「いや」を重ねて否定の気持ちを強調する語である。また、「いやいや従う」とか、「いやいやながら去る」という「いやいや」は、いやだと思いながらも、という意味の副詞である。大和は、この、副詞「いやいやながら」と読むのである。

松浦は、「しぶしぶ」と読む。この、「しぶしぶ」というのは、「渋渋」といい、副詞である。これは、心が進まないさま、とか、いやいやながら、しぶりしぶり、という意味で、例えば、「しぶしぶ承知した」という風に、使う。

詩人 Keats は、それに続けて、

Ah, no!

と歌う。これは、前文の内容を否定する言い方である。つまり、「ハントは本当に出獄を待ち望んではいなかった」と打ち消すのだ、と思う。また同時に、「ハントは本当にただ牢獄の壁を眺めているばかりではなかった」と否定するのだ、と思われる。

問投詞 ah に、「予想の範囲内の驚き」が明示されているのも見事である。これは、無論、情報を確認した上での驚きである。ここは、Oh, no! では困る。出口訳を見ると、「ああ、いや!」と読む。「ああ」は、感動詞で、ものに感じて発する声、である。例えば、『謡曲』「鉢木」に、「ああ降つたる雪かな」という風に、用いる。或いは、呼びかける声、であるかも知れない。例えば、『謡曲』「安宅」に、「ああしばらく」という風に、である。「いや!」とは、否定の気持ちを表わす感動詞である。例えば、『古今著聞集』「16」に、「いや田におきては、はやくとられぬ。」とか、「いや、そうでもない」という風に、である。

大和訳を見ると、「ああ、否!」と読む。松浦は、「ああ、とんだお門ちがいだ!」と読む。「お門違い」とは、めざす家・人を間違えること、を意味する。転じて、見当ちがひ、という。例えば、「私を恨むのはお門違いだ」という風に、である。「とんだ」とは、「飛んだ」で、飛び離れているという意味であろうかという。これは、思いがけなく重大な、とか、思いもよらない、とか、たいへんな、とんでもない、という意味である。例えば、『東海道中膝栗毛』「3」に、「もふこの宿にとまろうじゃあねへか。なにとんだことをいふ。まだ八つにやあなるめへ。」とか、また、「とんだ災難」「とんだあやまち」「とんだお笑いぐさだ」という風に、使う。これは、逆説的に、予想外によい意味にも用いるという。例えば、「とんだ掘り出し物だ」という風に、である。

文学少年 Keats は、獄中の自由主義者 Leigh Hunt が、毅然たる態度を持ち続けていたことを予想しているのも、絶妙である。しかも、感嘆符を用いて、そんなハントを讃美しているのも、すばらしい。

投獄の身の上となると、人は誰もが気が弱くなるものだ。ある者は獄吏にお世辞をいう。また、ある者は役人に追従する。おべっかを使ったり、こびるものだ。これは人の世の常である。しかし、社会改革者 Leigh Hunt は、どんな立場に身を置こうとも、弱音を吐くような、そんな人物ではない。

Leigh Hunt の獄中生活について、上代たのは、

リー・ハントは遂に獄中の人となった。然し日ならずして嘆願書を提出し、獄中で家族と同居することまた昼間自由に接客すること等法外の要求を申出た。これは友人達の斡旋によって総て許可せられたのみならず、次いで獄医の厚意によって病舎の地階を二室、共同室、それに続いた寢室を与へられることになった。ハント夫妻はこの特権を出来るだけ利用して獄中に美しいホームを作ろうとした。共同室を立派な客間に改造した。——（中略）——客間にはピアノ

フォートが運ばれ、詩聖の胸像なども飾られた。また書架にはチョーサー、スペンサー、ミルトン、ドライデン等ハント愛好の詩集が慰め顔に並んでゐた。——（中略）——総てが美と安住の幻想的效果をもたらす様に工夫されてゐて、獄中に恰も仙境が出現したようだと言ふチャールズ・ラムも讃辭を呈してゐる。マリアンがソートンとデョンの2人の子供を連れてこの「仙境」に移つたのは3月16日である。

と紹介する。これは何という幸せな Leigh Hunt の獄中生活であつたことか。何という巡り合わせのよい Leigh Hunt であつたことか。そのような噂を耳にした文学少年 Keats は、声高らかに、

Far happier, nobler was his fate.

と歌い上げるのである。これは、無論、「運のよい Leigh Hunt」を称えるのだ、と思う。His fate という、人称代名詞の所有格 his というのは、he - his - him - his と変化する、2つめの his である。これは、Leigh Hunt その人を指す。

名詞 fate には、類似語 destiny, doom などがある。名詞 fate とは、事の成り行きが、不条理で、人為的にはどうにもならないことを強調するという。Destiny とは、事の成り行きの変更不能を強調するという。これは、しばしば、よい運命について用いるという。例えば、He became a man of destiny. (「彼は運のいい男になった。」) とか、また、It was his destiny to see his nation. (「国を救うのが彼の運命だった。」) という風に、である。Doom という名詞は、destiny や、fate がもたらす、破滅的な終局を指すという。例えば、He met his doom bravely. (「雄雄しく悲運の最期を迎える。」) という風に、である。Fate という語は、ラテン語の、*fatum* から發達した語で、「お告げ」「神託」「運命」という原義を有するという。これは、*fari* から變化した語で、もと、「話す」という動詞の、過去分詞 *fatus* の、中世形であるという。

詩人 Keats が、このような名詞 fate の、(神によって) 語られたこと、予言、という原義に託して、人知を超えた絶対不可避の「運命の力」をもつ、Leigh Hunt を厳肅に歌い上げるのも、感動深い限りである。思うに、この、名詞 fate に託して、詩人 Keats は、なによりも、「事の成り行きによって、Leigh Hunt が投獄された人であつた」と、まず歌い上げるのだと、思われる。そして、詩人 Keats は、「たとえそれが不条理で、即ち、物事の筋道が立たないことであつたとしても、それはどうする術もないことだ」と歌うのである。そして、詩人 Keats は、声高らかに、「これが Leigh Hunt 自身の運命だ」と歌い上げるのだと思われる。

それも、詩人 Keats は、『ギリシア神話』に登場する、あの「運命の三女神」(Fatal Sisters) をそれとなく明示しているのも、また面白い。「運命の三女神」というのは、(1)クロト (Clotho)、(2)ラケシス (Lachesis)、それに(3)アトロポス (Atropos) の、三女神である。

「運命の三女神 (Fates)」の中の最年少者は、Clotho である。Clotho は、人間の誕生を司り、生命の糸を紡ぐという。Clotho という語は、もと、ギリシャ語の、*Klotho* といい、spinner という原義を有するという。

Lachesis /lækəsis/ とは、人間の一生の長さや、運命を決定することを役目とした女神である。これも、もと、ギリシャ語の、*Lakhsis* といい、lot, destiny という原義を有するという。Atropos とは、人間の運命の糸を切る役目の女神である。Atropos

という語は、もと、ギリシャ語の、*Atropos*といい、inflexible という原義を有するという。

この、三女神が、それぞれの役目によって、Leigh Hunt の(1)誕生と、(2)生涯と、それに(3)死を支配している、とここに明示するのも、詩人 Keats らしい、Keats 好みの、独自の詩想である、と強調したい。

形容詞 happy というのは、「巡り合わせのよさ」を喜ぶ気持ちをイメージするという。類似語の glad は、「喜びの気持ちそのもの」を強調するという。Happy は、中英語の、偶然 (hap) の y (幸運による)、が原義であるという。この、形容詞 happy に託して、詩人 Keats は、なによりも、社会改革者 Leigh Hunt の「巡り合わせのよさ」を歌い上げるのだろう。

しかも、文学少年 Keats は、比較級を用いて、

Far happier, nobler

と歌い定める。詩人 Keats は、御覧のように、形容詞 happy, noble の、それぞれの形を変えて、happier, nobler と歌うのである。文学少年 Keats は、語尾に、-er を付けて、比較級を用いるのである。これは、何かと比較する歌い方である。詩人 Keats は、一体、何と比較するのか、が問題である。

思うに、詩人 Keats は、上記の、上代の解説を踏まえて見ると、この、比較級に託して、自由主義者 Leigh Hunt の、日頃の日常生活よりも、獄中生活の方がより幸せ (happier) であり、より高貴 (nobler) である、と歌い示すのではあるまいか。

形容詞 noble というのは、卑小さ、下劣さ、不名誉を潔しとしない性格や、精神の気高さの意味を含むという。類似語の、high-minded は、崇高な主義、主張を奉じ、首尾一貫して、これを堅持するという。例えば、a high-minded pursuit of legal reforms (「法律上の改革を目指す気高い努力」という風に、である。また類似語に、magnanimous がある。これは、特に、寛大で、加えられた損害を大目に見るなどのように、度量の大きいことを意味するという。例えば、magnanimous toward his former enemies (「旧敵に対して寛大である」という風に、である。形容詞 noble は、もと、ラテン語の、*gnobilis* といい、「よく知られた」「有名な」「高貴な生まれの」という原義を有するという。形容詞 noble は、知る (no) に足る (ble)、が原義であるというのも、面白い。

両者の形容詞はともに比較級である。これは投獄される前と、投獄された後の Leigh Hunt の運命を比較するのだと思われる。さらに、詩人 Keats は、この2つの比較級をより強めるために、副詞 far を添えるのである。つまり、

far happier, nobler,

と規定する。副詞 far は、このように、形容詞の比較級の前で、比較級の程度を強める副詞である。これは、much より口語的であるという。例えば、He's a far nicer companion than I expected. (「彼は思っていたよりずっといい仲間だ。)」という風に、である。副詞 far は、「程度が隔たって」いる、というイメージである。思うに、詩人 Keats は、この、口語的な副詞 far に託して、獄中生活の方が、

はるかに幸せであり、また、はるかに高貴であった。

とでも歌うのは、絶妙である。念のために、Cobuild 版を見てみると、You can use far to mean 'very much' when you are comparing two things and emphasizing the dif-

ference between them. For example, you can say that something is far better or far worse than something else to indicate that it is very much better or worse. You can also say that something is, for example, far too big to indicate that it is very much too big.と説明する。この far は、上記に指摘した、much ではなく、very much という意味であるという。つまり、詩人 Keats は、

Very much happier, (very much) nobler

と歌うのだという。出口訳を見ると、「かれの運命は遙かに幸せて 高貴だった!」と読む。大和訳を見ると、「彼の運命はもっともっと幸福で高尚であったのだ!」と読む。松浦は、「彼の運命 (さだめ) ははるかに倖せて気高かった!」と読む。

遙という語は、追 (しょう) からきていて、さまよう、という意味であるという。遙かは、近づきがたく奥深いさま、をいい、程度がはなはだしいさま、をいう。幸とは、死ぬべきときに、死をまぬかれる、という意味であり、転じて、さいわい、ねがう、という意味であるという。つまり、幸は、思いがけないしあわせにめぐりあうことを明示し、倖は、まぐれさいわい、という意味で、幸に通じるという。福は、禍の反対語で、しあわせよく、ゆたかなこと、をイメージするという。出口は「幸せて」と歌い、大和は「幸福で」と読み、松浦は「倖せて」と見る。三人三様の解釈で、面白い。

また、形容詞 noble を、出口は「高貴だった」と読み、大和は「高尚であったのだ」と見る。松浦は「気高かった」と読む。これも、三人三様の解釈で、面白い。念のために、高尚とは、学問・言行などの程度が高く、上品なこと、を明示する。例えば、「高尚な趣味」という風に、である。高貴とは、官位・身分の高く、貴いこと、を明示する。例えば、「高貴な出」という風に、である。気高いは、形容詞で、古くは清音で、けたかし、という。これは、品格が高い、上品である、高貴である、という。例えば、『枕草子』「185」に、「もとの君たちのなりあがりたるよりもしたり顔にけだかういみじうは思ひためれ」という風に、である。

思うに、文学少年 Keats は、厳粛に、

威厳のある寵臣よ、汝は彼が出獄を待ち望んでいたと思うかい？

貴方は、到底好まないとしても、牢獄の扉を開けるまでずっと

汝は彼がただ牢獄の壁を眺めているばかりであったと思うかい？

ああ、そんな彼ではない！ 彼の運命は遙かに幸せて、高貴であった。

と歌うのではあるまいか。これが、「2 番目の 4 行」(the second quatrain) の世界である。漢詩の「起承転結」の「承」の世界である。これは、「最初の 4 行」が、当時の娑婆での、日常生活での、社会改革者 Leigh Hunt が、鋭い目で大空を翔る雲雀のように、自由で、意気揚々としていた詩境であるのに対して、獄中生活中の、遙かに幸せな、遙かに高貴な、自由主義者 Leigh Hunt を賛美する詩興である。これが、前半の 8 行の世界である。

それでは、後半の 6 行の世界を精読してみることにしよう。文学少年 Keats は、

In Spenser's halls he strayed, and bowers fair,

Culling enchanted flowers; and be flew
With daring Milton through the fields of air;
To regions of his own his genius true
Took happy flights. Who shall his fame impair
When thou art dead and all thy wretched crew?

と高らかに歌い上げる。

ここにいう、Spenserとは、下記に指摘するように、16世紀のイギリスの詩人 Edmund Spenser のことである。のちに、「詩人の中の詩人」(the poets' s poet) といわれる。傑作中の傑作は、『妖精の女王』(*The Faerie Queene*) である。また、Milton というのは、17世紀のイギリスの詩人 John Milton のことである。傑作中の傑作は、『失樂園』(*Paradise Lost*) である。両者はともに、自由主義者 Leigh Hunt の、最も愛する先輩詩人である。

文学少年 Keats が注目した、Spenser は、

たまたま恩人 Leicester 伯が Elizabeth 一世の怒りにふれて遠ざけられた。それは 1579 年のことであって、そのために、スペンサーは直ちに筆をとって時局諷刺詩 "Prosopopoia, or Mother Hubberds Tale" を書き、恩顧に報いたが、結果はかえってスペンサーの不利益に終わり、1580 年 Arthur Grey de Wilton が Ireland 総督となるに及んで、彼はその秘書として同地に渡った。

という、いわば、都落ちする身の上となった Spenser である。その原因は、上記の、引用文中の、時局諷刺詩である。これは、1388 行におよぶ作品である。内容は、

自分たちの境遇にあきたりない狐と猿とが、司祭や廷臣などの姿に変じて旅をするが、ついに Jove に元の姿をあらわされるとという筋で、教会や宮廷などを諷したもの。

である。手元にある、R. Morris が編集した『スペンサーの作品集』(*The Works of Edmund Spenser*) を参照してみると、

PROSOPOPOIA:

OR

MOTHER HUBBERDS TALE

BYED. SP.

と題する。そして、詩人 Spenser は、その下に、

Dedicated to the Right Honorable, the
LADIE COMPTON AND MOUNTEGLE.

TO the RIGHT HONORABLE, the
LADIE COMPTON AND MOUNTEGLE.

と明記し、尊敬する夫妻に捧げている。そして、詩人 Spenser は、「前書き」を添える。長い文であるが、以下に紹介しておきたい。ご覧の通り、当時の英語である。読みづらいが、しかし、当時の詩人 Spenser が、恩人 Leicester 伯爵やその奥方に、心からの謝意を述べているのは、見事である。

Most faire and vertuous Ladie; having often sought opportunitie by some good

meanes to make known to your Ladiship the humble affection and faithfull duetie, which I have alwaies professed, and am bound to beare to that House, from whence yee spring, I have at length found occasion to remember the same, by making a simple present to you of these my idle labours; which having long sithens composed in the raw conceipt of my youth, I laltely amongst other papers lighted upon, and was by others, which liked the same, mooved to set them forth. Simple is the device, and the composition meane, yet carrieth some delight, even the rather because of the simplicitie and meannesse thus personated. The same I beseech your Ladiship take in good part, as a pledge of that profession which I have made to you; and keepe with you untill, with some other more worthe labour, I do redeeme it out of your hands, and discharge my utmost dutie. Till then, wishing your Ladiship all increase of honour and happinesse, I humbly take leave.

Your La: ever humbly;

ED. SP.

と、真心を捧げる。この時局諷刺詩を踏まえて、文学少年 Keats は、先輩詩人 Spenser に重ねて、自由主義者 Leigh Hunt を歌い上げるのだ、と思われる。このように、前者 Spenser は、時局を諷刺する詩人である。

また、後者 Milton は、時局を暴露する自由主義者である。川崎寿彦は、

故国はもはや牧歌詩を求めていなかった。彼は自己の思想と信念を主張することを急務と感じ、散文による著作活動を開始した。まず宗教の自由を主張する論陣を張った。続いて、自分の結婚が失敗するという苦い体験のあと、離婚も含めて個人の良心の自由を主張する一連の離婚論。さらには言論と出版の自由を主張する。これらの主張の内容が、一つ一つ、近代的自由の理念と合致している事実からしても、いかにミルトンが、そして彼が身を投じた清教徒革命が、自由なる市民社会実現の方向を志向していたか、明らかとなるであろう。

と論及する。

詩人 Spenser は、先輩の Geoffrey Chaucer (1340 - 1400) 以来の大詩人であり、また、劇における William Shakespeare (1564 - 1616) とともに、イギリス・ルネサンスの最高峰を占める人物である。さらに、Spenser は、彼の創始になる、Spenserian stanza や、Spenserian sonnet などをはじめとして、「その韻律の陶醉忘我的な音楽美と、豊醇秀麗な形象の絵画美と相まって、ほとんどその追随者を見ない」といわれる程の大詩人である。

思うに、文学少年 Keats は、この、先輩の大詩人 Spenser の系列に、並び立つ大詩人 Leigh Hunt を位置づけ、自由主義者 Leigh Hunt を称賛するのも、Keats らしい斬新なアイデアである。

また、文学少年 Keats が注目した孤峰 Milton は、重複するが、「当時の国教会の腐敗を痛罵する」Milton その人であり、また、「宗教上の自由」や、「離婚論」、「言論の自由」、さらに「Charles 一世の処刑の正当性」を堂々と主張する Milton その人である。

また、Milton の傑作『失樂園』の中の、あの「壮大な墮天使の性格中に、自由の

ために闘って今や王党の圧迫を忍ぶ」Milton その人に、詩人 Keats は、自由主義者 Leigh Hunt を重ねているのも、見事である。傑作「闘士サンソン」の中の、あの「当時の淫らな世風に対し毅然として節を守った清教徒詩人の面影を彷彿させる」Milton その人に、「闘士サンソン」ならず、闘士 Leigh Hunt の面影を追いかけて、詩人 Keats は、この先輩の大闘士 Milton の系列にも、並び立つ大論客 Leigh Hunt を位置づけているのも、感動深い。

このように、これら 2 人の先輩詩人、Spenser と、Milton の系列に並び立つ自由主義者 Leigh Hunt を位置づけて、堂々と歌い上げるのが、この後半の 6 行の重要なテーマである。

詩人 Keats は、厳肅に、

In Spenser's halls he strayed, and bowers fair,
Culling enchanted flowers; and he flew
With daring Milton through the fields of air;

と歌い定める。ここに歌う、Spenser's hall (s) というのは、無論、アイルランドの「宏壮な邸、Kilcolman Castle」といわれる、彼の館である。想起するのは、Spenser の、恩人 Leicester 伯爵が Elizabeth 女王の怒りに触れて、遠ざけられたのは、1579 年のことであった。Spenser は、直ちに筆をとって、上記の、時局諷刺詩を書き上げ、恩顧に報いたのだが、結果は返って Spenser の不利益に終わり、Arthur Grey de Wilton が、アイルランド総監となるに及んで、Spenser はその秘書として、アイルランドに渡ったのは、1580 年のことであった。

その後、Spenser は、官吏として依然アイルランドに止まり、Munster 州の植民開拓官となったのは、1586 年のことであった。さらに、Spenser は、同州の Cork に近く、上記の、宏壮な邸 Kilcolman Castle に住み着いたのは、1588 年のことであった。Spenser は、ここに移り住み、文筆に親しみながら、遂に一生をアイルランドに過ごす結果となったという。

確か、アイルランド市民の蜂起によって、Spenser の、この、Kilcolman Castle もまた、突然焼き討ちを受けたのは、1598 年のことであった。幸いにも、Spenser は家族とともに辛うじて Cork に逃れたという。

詩人 Keats が歌うのは、御覧のように、複数形名詞 halls である。この複数形名詞 halls に託して、詩人 Keats は、昔の王侯邸宅の、大広間を歌うのではあるまいか。

思うに、文学少年 Keats は、上記の、Spenser の大邸宅を思い浮かべながら、

ハントはスペンサー館の大広間の中をさ迷った

と歌うのだろうか。

首都 Cork は、アイルランド共和国南部 Munster 地方の州の、海港でもある。念のために、Blue Guide を見ると、

Cork (in Irish *Corcaigh*, a marsh), the third city of Ireland, and the second in the Republic, is one of marked . . . , Since Spenser's day, when he described the site and 'The spreading Lee that, like an island fayre, Encloseth Corke with his divided flood', . . .

と説明する。Cork という語は、アイルランド語で、*corcaigh* といい、「沼地」という原義を有するという。Cork は、アイルランドでは、三番目の大都市であり、共和国後、Cork は、二番目の、商業の大都市であるという。Spenser の時代以来、Cork は、Spenser も描写しているように、遺跡と洪水の都市であるという。

Blue Guide によると、Spenser が生活していた、あの Kilcolman Castle について、

Some 3 m. N. W. of the village stand the ruins of Kilcolman Castle, the home—or in an adjacent house—for eight years of Spenser, who wrote here the first three books of the 'Faerie Queene'. The castle is ruined above the ground floor, but the top of the walls can be reached by a turret stair . . . Spenser, as secretary to Lord Grey, the Lord Deputy, came into possession of the property in 1586 after the forfeiture of the Earl of Desmond's estates, and took up residence in 1588; but in the following year a visit of his friend Raleigh decided him to publish his poem, and he moved to London, remaining there until 1591, when he reluctantly returned to Kilcolman—the period of 'Colin Clouts come home againe'—and remained here until 1598, when the house was burned during Tyrone's rebellion. In 1594 he married Elizabeth Boyle, daughter of a gentleman of the neighbourhood.

と案内する。Kilcolman 村の北西部3マイルのところに、崩壊した Kilcolman Castle が無惨にも立っている。ここで、Spenser は8年間暮らし、あの有名な『妖精の女王』の最初の3巻をここで書き上げたという。地上の建物は廃墟となっているが、城壁の頂上へは、残された1つの櫓の石段を辿って登ることができるという。Spenser は、Lord Grey の秘書となって、アイルランドに渡ったことは、既に上記に指摘しておいた通りである。

それも、詩人 Keats は、

In Spenser's halls he strayed,

と歌う。動詞 *stray* は、Cobuild 版によると、If someone strays somewhere, they wander away from where they are supposed to be. と説明する。特に、wander away from where they are supposed to be. が重要である。定まった方針や、定まった目的がなく、横道にそれる、はぐれる、という意味の自動詞である。*Stray* という語は、もと、ラテン語の、*extra, vagari* から発達した語で、to wander outside という原義を有するという。

形容詞 *stray* で、想起するのが、a stray sheep (「迷える羊」) である。これは、ご存知の、『聖書』『イザヤ書』第五十三章第六節に、

All we like sheep have gone astray; we have turned every one to his own way; and the Lord hath laid on him the iniquity of us all.

と明記されている神の言葉である。「われわれはみな羊のように迷って、」いるという。そして、「おのおの自分の道に向かって行った。」という。この、神の言葉を踏まえて、詩人 Keats は、社会改革者 Leigh Hunt もまた、迷える羊、の一人である、と歌い上げるのではないか。しかも、自由主義者 Leigh Hunt は、大詩人 Spenser の大邸宅の中で迷いながらも、それはそれなりに、Leigh Hunt は自分自身の道に向かってゆく姿を厳格に歌い示しているのも、見事である。

思うに、詩人 Keats は、

ハントはスペンサー館の大広間の中をさ迷った
と歌うのではないか。そして、詩人 Keats は、それに続けて、

..., and bowers fair,

と歌う。これは、恐らくは、

..., and (in Spenser's) fair bowers (he strayed),

と歌うのではあるまいか。等位接続詞 and が示すように、文法的に等しい位のものを接続する語であるからである。つまり、Spenser's halls と、Spenser's bowers とが同列に並んでいるからである。

しかし、ここにいう、名詞 bower (s) は、厄介である。これは、勿論、Spenser's bowers を指すのだと思うのであるが、しかし、念のために、Cobuild 版を見てみると、A bower is a shady, leafy shelter in a garden or wood; a literary word. とだけの説明である。これは、文語で、「木陰の休息所」「東屋 (あずまや)」という意味だろう。日本語の東屋というのは、東国風のひなびた家という意味である。思うに、詩人 Keats は、

スペンサー館のあずまや

とでも歌うのだろうか。(1)「東屋」でもよし、である。がしかし、それとも、この、名詞 bower (s) には、別に、(2) 文語として、中世の城中の「婦人の私室」「閨房」という意味がある。また、古語として、イギリス北部地方の方言として、「寝室」という意味があるという。

思うに、詩人 Keats は、

スペンサー館の妻の私室

とでも歌うのではあるまいか。(2)「妻の私室」もまたよし、である。それとも、名詞 bower には、(3) 詩語として、うるさい世間から逃れるための、「隠れ家」という意味があることを思うに、詩人 Keats は

スペンサー館の隠れ家

とでも歌うのか、である。(3)「隠れ家」と読めないことはない。

なにはともあれ、「あずまや」とでも読めるし、「婦人の私室」とも読めるし、さらに、「隠れ家」とも読むことができよう。がしかし、文学少年 Keats は、

bowers fair,

と規定する。形容詞 fair は、厄介である。これは、恐らくは、文語としての、形容詞 fair であって、例えば、a fair woman [lady] (「見目うるわしい婦人」) とか、a fair landscape (「美しい風景」) という風に、使われる形容詞 fair であるかも知れない。すると、詩人 Keats は、

美しいあずまや

とでも歌うのだろうか。それとも、

美しい婦人の私室

とでも歌うのか、である。それとも、

美しい隠れ家

とでも歌うのか、となると、ただ戸惑うばかりである。しかし、文脈から見ると、「隠れ家」は、どうも問題外であろうかと思われる。残るのは、「あずまや」か、それとも、「婦人の私室」か、である。

問題は、前置詞 in の使い方である。詩人 Keats は、言い換えると、恐らくは、

He strayed in Spenser's halls, and fair bowers,
と歌うのだろう。この、前置詞 in を、どう読めばよいのか、である。自動詞 stray は、重複するが、(1)「はぐれる」という意味を持つ。この場合は、例えば、sheep straying from the fold. (「群れからさまよい出た羊」) という風に、前置詞 in ではなく、前置詞 from を使うことは、既に、承知している。

また、自動詞 stray は、別に、(2)「……に迷い込む」という意味を持つ。この場合は、例えば、a child that has strayed into the wood. (「森の中に迷い込んだ子供」) という風に、前置詞 in ではなくて、前置詞 into を用いることも、承知している。前置詞 into の基本イメージは、「柰 (in) にむかう (to)」である。前置詞 from の基本イメージは、「起点」である。また、前置詞 in の基本イメージは、「柰・縁取り」である。

思うに、詩人 Keats は、この前置詞 in に託して、隣の地域との境界を持った「Spenser 館 (大邸宅)」をまず歌い上げるのだと思われる。そして、詩人 Keats は、

..., and bowers fair,
と歌うのである。これは、恐らくは、

Spenser 館の私室

を歌い伝えるのではあるまいか。これは、「Spenser 館」という囲いの中の「Spenser の私室」という柰の中をさ迷う、と歌い伝えるのではあるまいか。

それとも、詩人 Keats は、大胆にも、形容詞 fair に託して、

Spenser 館の妻の私室

をそれとなく示しているのではあるまいか、というのが、筆者の解釈である。大和訳を見ると、「彼はスペンサーの詩仙堂や美しい四阿 (あずまや) で……逍遙し、」と読む。松浦は、「あの人は、スペンサーの館 (やかた) を、美しい四阿 (あずまや) を逍遙ったのだ、」と読む。

思うに、自由主義者 Leigh Hunt は、「Spenser の大邸宅 (館)」の中に迷い込む (into)、のは、当然のことであるのだが、しかし、館ではなく、先ず、

ハントはスペンサー館の大広間の中をさ迷った

と詩人 Keats は歌い上げるのではないか。そして、詩人 Keats は、それに続けて、Leigh Hunt が、

スペンサー館の妻の私室の中をもさ迷った

と歌うのではないか。これが、筆者の解釈である。出口訳を見ると、「スペンサーの大広間や、美しいあずまやをさまよい歩き」と読む。気になるのが、「あずまや」である。詩人 Keats は、名詞 hall (s) に、複数形-s を用いて歌い、さらに、詩人 Keats は、名詞 bower (s) にも、複数形-s を用いて歌うのを見ると、後者の複数形名詞 bowers は、少なくとも、2軒以上のあずまや、があることになるからだ。

それよりも、筆者は、やはり、この、fair bowers を、「奥方の美しい私室」と読みたい。理由は、いくつかある。その(1)は、Spenser の妻となった Elizabeth Boyle への思慕を歌った、あの Amoretti が思い出されるからである。また、(2) Boyle との結婚を祝福し折った、あの Epithalamion を思い出すからである。そして、詩人 Keats が、厳粛に、(3) 次の詩行を歌い続けているからである。それは、

Culling enchanted flowers;

という詩行である。つまり、ここにいる、enchanted flowersというのは、即ち、上記に既に紹介しておいた、(1)、(2)の、妻に捧げた『愛の詩集』に収められた愛の詩篇そのものである、と思われるからである。

故に、思うに、Leigh Huntは、先輩詩人Spenserの、これらの愛の詩集を携えて、

ハントはスペンサー館の妻の私室の中をさ迷った

と味読する方が、かえって、ロマン派詩人Keatsの、Keatsらしい、Keats好みの詩境が表白されていると思われるからである。また、詩人Keatsは、自由主義の戦士Leigh Huntの、Leigh Huntらしいロマン派詩人の一面を大胆不敵にして且つロマンチック的に明示しているのも、絶妙な詩興である。見事であると強調しておきたい。

詩人Keatsもそうであるが、自由主義者Leigh Huntもまた、なによりも、先輩詩人Spenserの悲運の中の「美と愛に対するプラトンの青春の頌歌」を愛し、さらに、Spenserの「キリスト教的な天上の讃歌」を同感するのも、素晴らしい限りである。文学少年Keatsは、あえて、文語としての、複数形名詞bowersを、文語のfairという形容詞で形容しているのも、なんと巧みな歌振りではないか。

文学少年Keatsは、それに続けて、重複するが、

Culling enchanted flowers;

と歌い定める。動詞cullという語は、もと、ラテン語の、*colligere*からの発達語である。原義は、to collectであるという。花などを摘み、摘み集める、という他動詞である。詩人Keatsが歌う、culling...は分詞構文である。その主語は、無論、he (= Leigh Hunt) である。

ハントは花々を摘みながら、

とでも歌うのか。花は花でも、

enchanted flowers

である。ここにいる、形容詞enchantedとは、動詞enchantが、enchant - enchanted - enchanted - enchantingと変化する、3番目の、過去分詞enchantedである。例えば、fairy-tales about sprites who enchant handsome princes and beautiful maidens (「美しい王子や乙女を魔法にかける妖精の登場するおとぎ話」) という風に、使う動詞enchantである。この、動詞enchantという語は、もと、ラテン語の、*incantare*からの発達語であって、「魔法をかける」(to chant a magic formula against) という語源を有するという。詩人Keatsは、

魔法をかけられた花々

とでも歌うのだろうか。「うっとりとした花々」でも、よいかと思う。思うに、魔法をかける、という主語は一体誰かが、問題である。

再度思うに、魔法をかけるのは、妖精である。妖精といえば、想起するのが、Edmund Spenserの傑作『妖精の女王』(*The Faerie Queene*) という作品である。この作品故に、詩人Edmund Spenserは、別に、「妖精詩人」(Elfin Poet) と呼ばれるようになったことなどを思うに、嘗て、その昔、この大邸宅の主人、即ち、妖精詩人Spenserが丹精して育てた花々、即ち、愛の詩集を、ここに詩人Keatsは切々と歌い上げるのではあるまいか。これが、筆者の解釈である(拙文「詩人としてのJohn Keats

の転換点——“Spenser! A jealous honourer of thine”」〔本誌、第18号、2006年12月〕を是非とも参照していただきたい。

思うに、詩人 Keats は、

ハントは魔法をかけられた花々を摘みながら、
と歌い上げるのではないか。ここに、詩人 Keats 本来の、持って生まれた詩魂が自然に吐露されているのも、心楽しい限りである。動詞 cull は、pick の文語である。enchant というのは、中に (en) 歌う (chant)、が原義のもとである。魔法をかけるように、歌うのが、詩人 Spenser の、あの愛の詩集である。Leigh Hunt は、尊敬する先輩詩人 Spenser の愛の詩集を手にもって、あるいは、それを口ずさみながら、

ハントは、魔法をかけられた花々を摘みながら、スペンサー館の
大広間の中を、また、奥方の私室の中をも、さ迷った

と歌うのだらう。松浦は、この、culling について、

Culling = picking, gathering
と注釈を添える。重複するが、動詞 cull は、pick の文語である。出口訳を見ると、「魔法にかけられた花々を摘み取り」と読む。

大和訳を見ると、「魔力ある花々を摘んで（逍遙し、）」と読む。松浦は、「世にもめぐしい花をつもとりながら」と読む。「めぐし」とは、愛し、という形容詞である。これは、胸が痛むほどかわいい、いとしい、という意味である。例えば、『万葉集』五巻に、

父母を 見れば尊し 妻子（めこ）見れば めぐし愛（うつく）し 世の中は
という挽歌の示す風に、使われるという。

また、摘という語は、二本の指（親指・人さし指）で両方からはさむさま、を意味する語源（当）からきているという。

なによりも、まず、enchanted flowers という詩句は、後のロマン派詩人 Keats の、好みの詩境である。妖精の詩人 Edmund Spenser が妻 Elizabeth Boyle によせる愛の詩群を歌う。それは、重複するが、*Amoretti and Epithalamion* という愛の詩集である。これが野の花々そのものである。その花々に魔法をかけると歌う。魔法をかけられた野の花々は、詩人 Spenser の、その歌声にうっとりする。アイルランドの野のユリ（= Elizabeth Boyle）の花も然りだ。詩人 Leigh Hunt もまた、然りである。文学少年 Keats もまたそうである。誰もが、Spenser の、その「陶醉境」に誘われる。これが、詩人 Keats の、Keats らしい「妖精詩人 Edmund Spenser 観」である。

妖精詩人 Spenser が、その昔、恋人 Elizabeth Boyle に捧げた、Sonnet を以下に紹介しておこう。

Happy ye leaves! When as those lilly hands,
Which hold my life in their dead-doing might,
Shall handle you, and hold in loves soft bands,
Lyke captives trembling at the victors sight.
And happy lines! On which, with starry light,
Those lamping eyes will designe sometimes to look,

And reade the sorrowes of my dying spright,
Written with teares in harts close-bleeding book,
And happy rymes! Bath'd in the sacred brooke
Of Helicon, whence she derived is;
When ye behold that Angels blessed looke,
My soules long-lacked foode, my heavens blis;
Leaves, lines, and rymes, seeke her to please alone,
Whom If ye please, I care for other noue!

と歌う。これは、1595年に出版された合本の詩集である。ご覧の通り、16世紀の英語である。詩人 Spenser は、自分の一生を託した、ユリの花との出会いの幸運を切々と歌い上げるのである。愛の詩人 Spenser が躍動しているのは、素晴らしい限りである。後日、稿を改めて、Spenser の、この sonnet を論述してみたいものである。

そして、詩人 Keats は、それに続けて、
...; and he flew

With daring Milton through the fields of air;
と歌い定める。動詞 fly は、fly - flew - flown - flying と変化する。ここに、詩人 Keats は、2つ目の、過去形動詞 flew を用いる。これは、自動詞である。

ハントは飛んだ
と歌うのだらう。しかも、詩人 Keats は、

With Milton
と定める。これは、

ハントはミルトンと一緒に飛んだ
と歌うのだらう。Milton については、既に、上記に指摘しておいた。自由主義者 John Milton である。しかも、詩人 Keats は、御覧のように、

With daring Milton
と規定する。形容詞 daring /deəriə/ は、Cobuild 版によると、A daring person is willing to do things that might be dangerous. と説明する。「身の危険を顧みず、喜んで事を成し遂げる」人 Milton を、ここに声高く歌うのだらう。ここは、恐らくは、

大胆不敵なミルトンと一緒に
という意味だろうか。形容詞 daring は、動詞 dare が、dare - dared - dared - daring と変化する、4番目の現在分詞 daring である。動詞 dare は、「～する大胆さがある」が本義である。これは、良い意味にも、悪い意味にも使われる語であるが、詩人 Keats は、なによりも、詩人 Milton の、あの革命的な、且つ冒険的な勇気を称えるのだと思われる。前置詞 with は、守備範囲の広い前置詞で、日本人には厄介である。前置詞 with の基本イメージは、「共に」「共有」である。

大和訳を見ると、「剛胆なミルトンと共に」と読む。松浦は、「雄雄しいミルトンと、」と読む。出口訳を見ると、「逞しいミルトンとともに」と読む。剛胆とは、胆力がすわっている。おそれず沈着なこと。大胆を明示する。例えば、「剛胆無比の男」とか、「剛胆な若者」という風に、使う。雄雄しいというのは、男らしい、勇ましい、けなげだ、という意味である。例えば、「雄雄しくも気高く」という風に、

である。これは、女々しいの反対語である。逞しいとは、存分に力強く、がっしりしていること。勢いや意志が強かさかんである、という意味である。例えば、『平家物語』「11」に、「黒き馬の太う逞しいに」という風に、用いる。

思うに、この前置詞 with（「一緒に」）に託して、清教徒革命の闘士 Milton と、自由主義の戦士 Leigh Hunt とが「共に」あるいは、「一緒に」という、緊密な関係を強調するのではあるまいか。そして、詩人 Keats は、この、2 人の先輩詩人たち、即ち、Edmund Spenser, John Milton の繋がりの中に、Leigh Hunt を位置づけて、さらに、それとなく、その系列の中に、後のロマン主義詩人 Keats 自身をも含めているのも、巧妙である。

繰り返すが、ここにいう、

he flew

というのは、

ハントは飛んだ

という意味だろう。それも、詩人 Keats は、

through the fields of air

と規定する。この、the fields of air というのは、厄介である。大和訳を見ると、「天空の野を飛翔して、」と読む。また、出口訳を見ると、「大気満ちる / 野原 ……飛びまわった。」と読む。松浦は、これを、「飛翔したのだ、……詩の大空を」と読む。そして、松浦は、

Fields = large stretch, expanse, of sea, sky, ice, snow, etc. 「(空・海の) ひろがり」と注釈を添える。

ここに想起するに、John Milton は「音楽に長じていた」大詩人である。両眼失明後の Milton は「均衡を得た形容詞の配置と音楽的な五音の美」を創造する偉大な詩人であることを思い併せてみると、ここにいう、名詞 air は、「天空」であり、また、「大気」という意味であろうが、しかし、これは「音楽」を意味する、名詞 air ではあるまいか、というのが筆者の解釈である。それは、無論、「旋律」でもよい。また、「メロディー」でもよい。aria でも、ayre でもよい、と筆者は解釈する。

筆者は、この、名詞 air を、「崇高なメロディー」と読みたい。「崇高な音楽」でもよい。理由は、これが、詩人 Milton の特徴を明示している、と思われるからである。つまり、詩人 Keats は、感動的に

ハントは大胆不敵なミルトンと一緒に、

崇高な音楽に満ちた野原を飛ぶように駆けた。

と歌い上げるのではあるまいか。これが、また、文学少年 Keats の「詩人ミルトン観」である。出口訳を見ると、「また 大気満ちる / 野原を 逞しいミルトンとともに飛びまわった。」と読む。出口は、形容詞 daring を、「逞しい」と読むのだ。これは、「存分に力強く、がっしりしている」筋骨逞しい Milton を歌うのではあるまい。恐らくは、出口は、「勢いや、意志が力強くさかんである」詩人としての逞しい生活力の Milton を読むのだと思われる。

思うに、詩人 Keats は、先輩詩人たちに向かって、声高らかに、

スペンサー館の大広間の中や、奥方の美しい私室の中をも、彼は
魔法をかけられた花々を摘みながら、さ迷った。彼は
大胆なミルトンと一緒に崇高な音楽の満ちた野原を駆け抜けた。

と厳格に歌うのではないか。これが、後半6行 (Sestet) の「最初の3行」(the first tercet)の世界である。漢詩の「起承転結」の「転」の世界である。ここに、2人の先輩詩人 Edmund Spenser と、John Milton を登場させるのが、新しい着想で、意味深い。自由主義者 Leigh Hunt は、「迷う羊」として歌われ、2人の先輩詩人の功績の足跡を辿っているのも、詩人 Keats の斬新な idea である。

Allott は、この、3行について、

Hunt's admiration for Spenser and Milton is warmly expressed in *The Feast of the Poets* (1811).

という注釈を添える。「Hunt の、Spenser や、Milton に寄せる崇拜の念は、『詩人たちの祝宴』の中に、温かく表現されている」という。1811 年とあるが、これは、1814 年の誤植であろうか。

思うに、詩人 Keats は、社会改革者 Leigh Hunt が上記2人の先輩詩人 Spenser と、Milton の系列に並び立つ、詩人 Leigh Hunt であることを、強調しているものと思われる。恐らくは、詩人 Keats 自身もまた、この、3人の系列に並び立ちたい、という詩的願望を夢見ているのかも知れない。

文学少年 Keats は、それに続けて、

To regions of his own his genius true

Took happy flights. Who shall his fame impair

When thou art dead and all thy wretched crew?

と歌い納めるのである。まず、前半の英文を見てみると、主語は、His true genius, であろうか。動詞は、過去形動詞 took である。他動詞 took の目的語は、happy flights であろう。がしかし、詩人 Keats は、took flights という一つの自動詞として、歌うのかもしれない。例えば、take one's flight (「飛ぶ」「飛行する」) という風に、である。To regions of his own というのは、前置詞句で、名詞 happy flights を説明する、形容詞句であるが、しかし、この場合は、自動詞 took happy flights を説明する、副詞句であるのかもしれない。

まず、詩人 Keats は、

His genius took flights to regions of his own.

と歌うのか。これは、大和訳を見ると、「彼の (真の) 天才は独自の領域に見事にとんで行った」と読む。また、出口訳を見ると、「かれの (まことの) 天才は 思う存分 / 幸せに羽搏いた。」と読む。松浦は、「彼の (まことの) 才 (ぎえ) の世界に、たのしげに飛びさったのだ、」と読む。

筆者は、これを、

彼の天才は自由に羽ばたき自分の領域へ飛んでいった

と読みたい。名詞 genius とは、もと、ラテン語の、*genius* から派生した語である。「守護神または人の霊」(tutelary spirit, male generative or creative principle) という原義を有するという。これは、ラテン語の動詞、*gignere* から変化した名詞であって、to

beget (「生む」) という原義であるという。面白い。天才的才能は、生まれつきの才能である。それは、神業、に通じるという。

それも、詩人 Keats は、

his true genius

と規定する。これは「彼の生まれつきの創造的天分は本物である」と念を押すのであろうか。形容詞 true というのは、real なものとの一致、あるいは、actual なものとの一致を暗示するという。それでは、real とは、何か、である。これは、外見と実質〔実際〕が一致していることを強調するという。Actual とは、想像的[抽象的]なものではなく、現実存在する、あるいは、実際に起こったものであることを強調するという。

鬼塚は、副詞 really は、「本当に」は実感を込めた主観的な表現で、「実は」の意味でも本質は同じだという。「実は」でも、in fact は、「事実 (= fact) において (= in)」であるから、客観的な表現であるという。Actually は、「実は (…… なんだよね)」は、相手の予想に反することを述べる表現であるという。

しかし、truly の説明がない。形容詞 true は、古英語で、*treowe* といい、「忠節な」「信用できる」「正直な」という原義を有するという。面白い。例えば、He is a true lawyer, a credit to his profession. (「彼こそ真の弁護士であり、弁護士の誉れである。') という風に、使われる限定形容詞 true である。A real lawyer といえば、「本物の弁護士」という意味であるが、a true lawyer というと、「弁護士の中でも特にすぐれた弁護士」であるという。

思うに、詩人 Keats は、この、形容詞 true に託して、Leigh Hunt の天才は、天才の中でも特にすぐれた天才の持ち主であると、賞賛するのではあるまいか。

思うに、詩人 Keats は、

彼の真の天才は

と歌うのだらう。真とは、人がさかさになっている形であるという。顛倒の意味である。まこと、の意味に用いるのは、信、の借用であるという。

名詞 region は、もと、ラテン語の、*regio* からの派生語である。「方向、線、境界」という原義を有するという。動詞は、*regere* といい、「支配する」という。面白い。His own の、own は、「他人 (= 他者)」を意識する場合に用いる。この場合は、先輩詩人 Spenser や、Milton のそれと違って、Leigh Hunt は Leigh Hunt としての、Leigh Hunt 自身が支配する、領域を明示するのだと思う。

思うに、詩人 Keats は、この、忠実・正直を踏まえて、

ハントは守り神に忠実な人である

ことを歌うのだと思われる。しかも、詩人 Keats は、

ハントは生まれつきの創造的才能の持主

であり、

その中でも特にすぐれた才能の持主である

と歌うのではあるまいか。これが、文学少年 Keats の「詩人 Leigh Hunt 観」である。褒めすぎの感が大であるが、しかし、文学少年 Keats にとって、これは、誠の思いである。思うに、文学少年 Keats は、賛嘆の声を上げて、

彼の真の天才は自由に自分が支配する領域へ飛んでいった。

と歌うのではないか。それも、詩人 Keats は、

Took happy flights.

と歌い定める。これは、

幸せそうに飛んで行った

と歌うのではないか。この、形容詞 happy は、無論、名詞 flights を形容する。このように、形容詞 happy が、この sonnet に、2 度も使用されているのは、意味深い。(1) は、8 行目の、far happier のそれである。そして、(2) は、この、13 行目の、happy flights のそれである。両者はともに、勿論、「ハントの、巡り合わせの、よさ」を強調しているのだ、と読みたい。思うに、この、両者の形容詞 happy に託して、文学少年 Keats が、そんな Leigh Hunt をこの上なく賛美しながらも、自分に持ち合わせていない天分を羨む気持ちが思わず吐露されたと、見るのはいかがなものか。詩人 Keats には、到底、及ばない真の天才 Leigh Hunt なのである。

出口訳を見ると、「かれのまことの天才は 思う存分 / 幸せに羽搏いた。」と読む。まこと、とは、「ま (真) こと (事・言)」の意味である。真とは、人がたつ形となり、眞は人がさかさになっている形であるという。また、誠とは、成が音を表わし、かさなる、という意味の語源 (重) からきているという。言うことと心とが一致して、違わない、の意味であるという。そして、実とは、周の転音が音を表わすという。周は、みちる、の意味の語源 (稠・充) からきているという。家の中に財宝 (貝) がみちることの意味であるという。ひいては広く、みちる、みちたもの、の意味であるという。

誠は、偽の反対語で、ありのままで飾りのないことをいう。允は、いかにも、と訳し、事理がたがわずしっくりかなうことをいう。実は、虚の反対語で、充滿して欠けるところがないことをいう。信は、人の言行に矛盾のないことをいう。眞は、誠とほぼ同じで、まじりけがないことをいい、また、二つとない道理をいうという。

そして、文学少年 Keats は、

Who shall his fame impair

When thou art dead and all thy wretched crew?

と歌い納めるのだ。大和訳を見ると、「汝死に、汝のあさましい徒輩が皆死んだ時、/ 誰が彼の名声を損なうであろう？」と読む。また、出口訳を見ると、「誰が その名声を損えよう、/ おまえと 惨めなやからが ことごとく滅び去るとき。」と読む。松浦は、「おまえと、あさましい輩 (やから) どもが、みな死にたえたとき / たれか、彼のほまれを貶しうるものがあるか。」と読む。

貶というのは、右側の、乏の転音が音を表わし、へらす、という意味の語源 (減) からきているという。貝 (金銭) をへらすという意味から、転じて、おとす、退ける、という意味になったという。

損というのは、貝 (いん) の転音が音を表わし、手で取り去り、へらす、という意味であるという。損は、益の反対語で、物がそこなわれて不足するという意味である。

助動詞 shall は、厄介である。鬼塚がいうように、shall は、should や will とは全く切り離して考えるべきである。鬼塚説によると、shall は、「遠く絶対的な立場から

の命令・判断」であって、should よりむしろ、「遠く距離がある」という感じだという。面白い。

思うに、詩人 Keats が歌う、who shall ...? という、助動詞 shall は、文語であって、いわゆる、これは、修辞疑問文である、というのが筆者の解釈である。

筆者のいう、修辞疑問文というのは、英語で、Rhetorical question という。これは、形が疑問文であっても、内容的には平叙文に等しく、疑問文の形で、反語的に自分の考えを表現する文のことである。例えば、Who shall decide when doctors disagree? (「偉い専門家の方々の意見がまちまちなのに、だれが決められようか (だれにも決められない)。」) という風に、である。また、例えば、who does not know? は、即ち、これは、Everyone knows. という意味であるという。

松浦は、この、Who shall ... について、

Who shall ... = Who can ... = No one can ...

であるという注釈を添える。松浦訳を見ると、重複するが、「たれか、彼のほまれを貶しうるものがあるか。」と読む。この、貶を、一体、どう読めばよいのか。おとしうる、と読むのか。それとも、へらしうる、とでも読むのか。それにしても、「あるか」は、可笑しい。これは、多分、「あろうか」の誤植であろうかと思われる。

動詞 impair は、Cobuild 版を見ると、If something impairs something such as an ability or the functioning of something, it damages it or makes it worse; a formal word. と説明する。つまり、動詞 impair は、価値・能力などを損なう意味である。状態がしだいに悪化し、その結果が長く続くことを暗示することが多いという。例えば、One's health is impaired by overwork. (「人の健康は過労によって損なわれる。」) という風に、である。類似語に hurt, injure, damage などがある。

念のために、hurt は、有形・無形の物を傷つけるという意味で、最も形式ばらない語であるという。また、injure は、種類・程度に関係なく、いかなる損傷にも一般的にもちいられ、hurt より形式張った語であるという。Damage は、通例、有形無形の物に損傷を与える意味に用いられ、人の体を傷つける意味では用いないという。Impair という語は、中期フランス語の、*empeier* = *em-* (im-) + *peierkara* の発達語である。「悪くする」という原義を有するという。これは、もと、ラテン語の *pejorare* からの発達語であり、これは、ラテン語の、*pejor* という形容詞からの発達語である。「悪い」という。

詩人 Keats は、まるで裁判官が判決文を読むように、

誰が彼の名声を損なう運命であるのか。

と歌うのではないか。そして、詩人 Keats は、さらに、

When thou art dead and all thy wretched crew?

と歌い定める。ここにいう、人称代名詞 thou は、7 行目の、thou unturn'dst the key? の、thou その人である。Thou は、繰り返すが、you の古語である。この、thou は、無論、5 行目の、Minion of grandeur を指す。摂政皇太子 George にべこべこと、こびへつらう国会議員の寵兒 (寵臣) である。また、彼らの配下に、威厳をもて、脅す国会議員の寵兒 (寵臣) である。詩人 Keats は、この、裏表のある寵兒 (寵臣) を、重複するが、第二人称代名詞、you を用いたり、また、時には、thou を

使用して、歌い分けしていることを、既に上記に説明しておいた。

例えば、5行目の、Minion of grandeur, think you he did wait? という、youであったり、また、6行目の、Think you he naught but prison walls did see, という、youである。その、youに対して、7行目の、Till, so unwilling, thou unturn'dst the key? という、thouであったり、また、最終行の、When thou art dead and all thy wretched crew? という、thouである。

なにはともあれ、詩人 Keats は、

... and all thy wretched crew?

と規定する。Thy というのは、thou の所有格である。「貴方の」と歌うのだろう。名詞 crew とは、Cobuild 版を見ると、You can use crew to refer to a group of people you disapprove of, an informal use. と説明する。ここにいう、you disapprove of, が重要である。これは、集合的に用いて、しばしば軽蔑的に、「仲間」「連中」という意味を持つ。例えば、a dissolute crew (「放蕩仲間」) とか、また、a disreputable (「やくざ仲間、愚連隊」) という風に、である。

形容詞 wretched とは、Cobuild 版を見ると、You describe someone as wretched when you feel sorry for them because they are in an unpleasant situation or have suffered unpleasant experience; a formal use. と説明する。後半の、when you feel sorry for them because they are in an unpleasant situation or have suffered unpleasant experience; が重要である。

形容詞 wretched /réʃəd/ は、極端に悲惨なありさま、特にそれが外目にもあきらかな場合に用いるという。類似語に、miserable, sorry がある。Miserable は、不幸や苦悩のような内面的・精神的な側面を指すことが多いという。例えば、a miserable life (「惨めな生活」) という風に、である。Sorry は、(外的な状況が) 見る者にむしろ軽蔑の念を感じさせるほどにみすばらしいという。例えば、a sorry sight (「ひどい光景」) という風に、である。

形容詞 wretched とは、追い出された、が原義である。これは、外目にも明らかな、極端に悲惨なありさまをイメージするという。

思うに、詩人 Keats は、この、形容詞 wretched に託して、摂政皇太子 George に、こびへつらう寵児 (寵臣) ども。その寵児の配下にいる仲間たち、あるいは、こびへつらう寵児 (寵臣) を取り巻く仲間たちを、気の毒に思っているのではあるまいか。

Allott は、この、wretched crew について、

Wretched crew] Cp. *Nebuchadnezzar's Dream* 10-11 (pp. 289-90 below),

... a most worthy crew

Of loggerhead and chapmen ...

という注釈を添える。ここにいう、Cp. とは、Compare の略である。Allott は、「ネブカデネザル王の夢」と題する一篇の sonnet の、10 行目と 11 行目とを比較せよ、と指摘する。そこには、詩人 Keats は、... a most worthy crew (「どうしようもない連中が」) と歌い、そして、それに続けて、Of loggerhead and chapmen (「馬鹿とか客奮家の」) と歌っているというのだ。

ここにいう、worthy について、Allott は、

Worthy] valiant *Brown's MS*; motley *Woodhouse 3*. K. substituted 'worthy' for 'worshipful' in his draft.

という注釈を添える。Brown 版では、worthy を、valiant と歌い、また、Woodhouse 版では、worthy を、motley と歌うと言及する。ここにいう、形容詞 valiant は、文語で、「勇敢な」「英雄的な」という意味を持つ。Cobuild 版によると、A valiant action is very brave and determined, though it may lead to failure or defeat. と説明する。たとえその行為が結果として、失敗、あるいは、敗北となるかもしれないとしても、という後半の説明は意義深い。また、形容詞 motley は、「種種雑多な」「混成の」という意味を持つ。Cobuild 版を見ると、You can describe a group of things as a motley collection if you think they seem strange together because they are all very different. と説明する。Because they are all very different. という後半の説明は意味深い。

さらに、Keats 自身も、下書きの段階で、worthy を、worshipful と歌っていたというのだ。この、形容詞 worthy (「立派な」「尊敬すべき」) は、皮肉な意味合いで用いられる語であることに、注意しよう。ここにいう、形容詞 worshipful とは、通例、the Worshipful という、イギリスでは、「特殊な職業の人や、団体などの敬称として用いる語であって、例えば、the Worshipful Company of Fishmongers (「漁業組合殿」) という風に、使われる「尊敬すべき」「高名な」という意味を持つ。思うに、詩人 Keats は、この、worshipful というイメージを踏まえて、当時の、摂政皇太子 George に、こびへつらう寵児や、その配下らをすべて、人称代名詞 thou を用いているのも、面白い。これは、最終行、When thou art dead, and all thy wretched crew? と歌い納める、thou であり、また、thy であるのも、詩人 Keats らしい、Keats ならではの、優しい心根を表白した、人称代名詞なのである。これは、筆者の解釈である。

大和訳を見ると、「汝死に、汝のあさましい徒輩が皆死んだ時、」と読む。松浦は、「おまえと、あさましい輩どもが、みなしにたえたとき、」と読む。出口訳によると、「おまえと、惨めなやからが、ことごとく滅び去るとき。」と読む。詩人 Keats の、この、人称代名詞 thou, you の使い分けがこのように無視されているのは、いかげなものか。

また、Allott は、loggerheads and chapmen について、

Loggerheads and chapmen] Fools and money grubbers

という注釈を添える。Allott は、「loggerheads を、fools (「愚か者」) である」と読み、また、「chapmen を、money grubbers (「吝嗇家」) である」と注釈するのだ。このような、当時のイギリス社会の、一般市民の中にも、「馬鹿者の連中」が居たり、また、「吝嗇家の連中」も居るように、貴族社会の中にも、これとよく似た「こびへつらう者」即ち、「寵臣」もまた居ることを、Allott は指摘するのである。

思うに、文学少年 Keats は、最後の3行をこう歌い納めるのではあるまいか。

彼の真の天才は自分が支配する領域へ幸せに飛んで行った。

貴方は死し、貴方の惨めな境遇にある仲間も皆死んだ時、誰が

彼の名声を損なうことができようか (誰も彼の名声を損えない)。

と歌い納めるのではあるまいか。これが、「最後の3行」の世界である。漢詩の「起承転結」の「結」の世界である。Leigh Huntが書き残した、改革的論断は、どれもこれも永遠不滅の、魂の発露である。人間は死すべきものである。がしかし、社会改革者であり、自由主義者であり、詩人である Leigh Hunt は、不死の人である、と詩人 Keats は声高らかに歌い上げるのではないか。そんな Leigh Hunt であるから、名声不朽の人である、と文学少年 Keats は厳粛に歌い納めるのではあるまいか。

想起するのが、「年年歳歳花相似たり」「年年歳歳人同じからず」という諺である。思うに、「不朽の名声」と「生者の必滅」との「対」の妙味が、絶品である。これが、この sonnet の、隠し味となっているのも、絶妙であると思う。

最後に、この名品「リー・ハント氏が出獄するその日を祝して記す」を心して静かに口ずさみ返してみたい。

たとえ、こびへつらう議会に対して真実を示さんがために、
親切なるハントが投獄されたとしても、然し振り返って見ると、
彼の不滅の霊において、鋭い目で大空を翔る雲雀のように
ハントは自由の人であり、また、意気揚々としていました。
威厳のある寵臣よ、汝は彼が出獄を待ち望んでいたと思いますか？
貴方は到底好まないとしても、牢獄の扉を開けるまでずっと、
汝は彼がただ牢獄の壁を眺めているばかりであったと思いますか？
ああ、そんな彼ではない！ 彼の運命は遥かに幸せで、高貴でした。
スペンサー館の大広間の中や、奥方の美しい私室の中をも、彼は、
魔法をかけられた花々を摘みながら、さ迷いました。彼は
大胆なミルトンと一緒に崇高な音楽の満ちた野原を駆け抜けました。
彼の真の天才は自分が支配する領域へ幸せに飛んで行きました。
貴方は死し、貴方の惨めな境遇にある仲間も皆死んだ時、誰が彼の
名声を損なうことができますか（誰も彼の名声を損なえない。）

味読精読した後で、筆者の思うこと・感じることは、この、一篇の玉詩 sonnet は、たとえ先輩詩人 Leigh Hunt に捧げた作品であっても、また、たとえ Leigh Hunt が出獄するその日を祝って、彼を出迎えにいくという親友 Charles Clarke に手渡した14行詩であっても、これは、決してこびへつらう詩風ではない、ということである。その理由は、無論、後輩詩人 John Keats が、裏表を使い分けて、世に対処するという、そんな器用な人物ではないからである。どちらかというに、詩人 Keats は不器用で、生真面目一本の人柄の浪漫派詩人であるからである。どの作品を見ても、詩人 Keats は、思うところを思うがままに、真実と美を歌い上げているからである。

なによりも、文学少年 Keats は、先輩詩人 Leigh Hunt を、雲雀に譬えていることである。しかも、雲雀は雲雀でも、それは、詩人 Keats 自身が考案した、“the sky-searching lark”であるからである。これは、「鋭い目をして大空を翔まわる雲雀」と明示し、その雲雀に託して、厳しく社会のあり方を凝視する、という批評家兼詩人 Leigh Hunt を高らかに歌い上げているからである。これは、詩人 Keats の斬新な着想である。

また、文学少年 Keats は、社会改革者の自由主義者 Leigh Hunt を、先輩詩人 Edmund Spenser や、先輩詩人 John Milton の系列に並び立つ偉大な評論家として列挙していることである。一方は、恩人 Leicester 伯爵が Elizabeth 女王の怒りに触れて遠ざけられた (1579 年) ために、直ちにペンをとって、時局諷刺詩 *Prosopopoia, or Mother Hubberds Tale* (1579 - 80 年執筆, 1591 年出版) を書き上げ、恩顧に報いた、という義理に厚い Spenser であるからである。また、他方は、当時の国教会の腐敗を痛罵する一節の激語は、作者の個性を十分に発揮したものであり、1642 年に結婚した Mary Powell との悲惨な生活に苦しんで、*The Doctrine and Discipline of Divorce* (1643 年) の離婚論を四たび公にしたり、また、言論の自由を主張してはかれの散文中最もすぐれた *Areopagitica* (1644 年) を執筆したり、さらに、*The Tenure of Kings and Magistrates* (1649 年) において、Charles I (1600 - 49) の処刑を弁護し、やがて共和政府を樹立した、という当時の淫靡な世風に対し毅然として節を守った清教徒詩人 Milton であるからである。

Charles I とは、イングランドの王 (1625 - 49) で、James I (1566 - 1625) の子である。清教徒革命により、断頭台で処刑された、Charles Stuart を指す。

James I とは、イングランドの王 (1603 - 25) で、Mary Stuart (Mary, Queen of Scots) の子である。James I は、James VI として、スコットランドの王 (1567 - 1625) になったが、Elizabeth I (1533 - 1603) の死後、イングランドの王を兼ねて、同国の Stuart 王朝を創設し、その治世中に、欽定英訳聖書 (Authorized Version) が完成したという。

Elizabeth I とは、Tudor 王朝のイングランド女王 (1558 - 1603) で、Henry VIII (1491 - 1547) と Anne Boleyn の娘で、異母姉 Mary I の後継者である。Tudor 王朝最後の君主で、彼女の後は、Stuart 王朝になった。彼女は、別に、Virgin Queen という。

念のために、Tudor 王朝というのは、ご存知の通り、Henry V の寡婦と結婚した、ウェールズ人 Sir Owen Tudor (d. 1461) の子孫である、Henry VII から Elizabeth I まで (1485 - 1603) 続いたイングランドの王家のことである。

この後を継いだのが、ご存知の、Stuart 王朝である。これは、Robert II から James VI に至るまで (1371 - 1603)、スコットランドに君臨し、同じ James VI がイングランドの、James I となって以後、共和制 (1649 - 60) を除いて、Anne 女王に至るまで (1603 - 1714)、イングランド・スコットランド両国に君臨した、イングランドの王家のことである。

そして、Hanover 王朝が続く。Hanover 王朝というのは、George I から Victoria 女王まで (1714 - 1901) のイングランドの王室のことである。George I はもと、ドイツの Hanover 選帝侯であって、後にイングランドの王になった、George I については、既に上記に紹介しておいた。

Queen Anne をもって、Stuart 王朝が絶えたため、1701 年に、王位継承法 (Act of Settlement) に基づいて即位した、英語の全く分からない、George I である。George I, George II, George III と時代が変わる。

問題の、George III (1738 - 1821) がイングランドの王 (1760 - 1821) の治世中に、アメリカが独立する。そして、晩年に、発狂して、長男の、George (IV) が摂政を

務めた (1811 - 20) という。

Leigh Hunt は、この摂政皇太子 George に対して、1812 年に攻撃文を草して、筆禍の厄に会い、兄 John Hunt とともに、2 年間の監禁を宣告されて、Surrey の刑務所に入れられ、罪びととなったことは、既に上記に詳しく指摘しておいた。

文学少年 Keats は、上記のように、論客としての Leigh Hunt は然ることながら、詩人としての Leigh Hunt をも高く評価している。例えば、この、sonnet の 9 行目の後半から、11 行目にかけて、

In Spenser's halls he strayed, and bowers fair,
Culling enchanted flowers . . .

With daring Milton through the fields of air;

と声高らかに歌い上げているからである。詩人 Leigh Hunt が、「妖精の詩人」Spenser の館を訪れ、野に咲き乱れる魅惑的な花々を摘みながら、流離う、というのではないか。この、魅惑的な花々は、勿論、その昔、Spenser がその地の恋人 Elizabeth Boyle に捧げた、*Amoretti* と題する愛の詩集であり、また、Boyle との結婚を祝った、*Epithalamion* と題する愛の詩集である。というのは、詩人 Leigh Hunt は、先輩詩人 Spenser の、「妻の私室」をも、足を踏み入れ、さ迷っているからである。

さらに、詩人 Leigh Hunt は、盲目の詩人 Milton の、もって生まれた「音楽」の豊かな感性によって、創造された、*Paradise Lost* は、絶品中の絶品である。主要人物は、主人公 Adam ではなく、なんと、Satan である。この、壮大な墮天使の性格の中に、詩人 Milton は、当時の王党派の迫害を受けた自己を投影したかのように見える、驚くべき偉大な傑作である。この、墮天使 Satan に、後輩詩人 Leigh Hunt は、今の自己を投影し、ともに、崇高な音楽の満ちた野原を駆け抜けているのもまた、絶妙な詩境である、ということである。

このように、文学少年 Keats は、この、enchanted flowers に託して、無論、詩人 Keats ならではの、Keats らしい、斬新な「詩人 Spenser 観」を明示しているのも、意味深い限りである。

また、同時に、文学少年 Keats は、この、the fields of air に託して、詩人 Keats らしい、Keats 独自の、斬新な「詩人 Milton 観」をイメージしているのも、味わい深い限りである。

(参考文献)

- Allot, Miriam, ed. *Keats: The Complete Poems*. New York: Longman Group Limited, 1970.
Barnard, Christopher. *53 Essays for Curious People*. Tokyo: Place, 2007.
——. *Japanese Don't Know English Grammar*. Tokyo: Kawadeshobo-Shinsha, 2005.
Barnard, John, ed. *John Keats: The Complete Poems*. Third Edition. Penguin Classics. London: Penguin Books, 1988.
Cary, Henry F., trans. *The Divine Comedy of Dante Alighieri*. The Harvard Classics. New York: P. F. Collier & Son Company, 1909.
Cerf, Bennet A. and Donald S. Klopfer. *John Keats and Percy Bysshe Shelley: Complete Poetical Works*. New York: The Modern Library, n.d.
Chaucer, Geoffrey. "The Night's Tale" in *The Canterbury Tales*. trans. Nishiwaki Junzaburo. Chikuma-Bunko. 2 vols. Tokyo: Chikuma-Shobo, 1993.

- Craig, W. J., ed. *Shakespeare: Complete Works*. London: Oxford UP, 1971.
- Deguchi, Yasuo, trans. *John Keats*. vol. 1. in 4 vols. Tokyo: Hakuosha, 1982.
- Hataya, Masao, trans. *Wordsworth's Poems*. Shincho-Bunko 125. Tokyo: Shinchosha, 1935.
- Hirakawa, Sukehiro, trans. *The Divine Comedy of Dante Alighieri*. Tokyo: Kawade-shobo, 1968.
- Hutchinson, Thomas, ed. *The Poetical Works of Wordsworth*. A new Edition, revised. Ernest De Selincourt. London: Oxford UP, 1961.
- , ed. *The Complete Poetical Works of Percy Bysshe Shelley*. London: Oxford UP, 1935.
- Jodai, Tano. *Leigh Hunt*. Tokyo: Kenkyusha, 1936.
- Kawasaki, Toshihiko. *Introduction to English Literature's History*. Tokyo: Kenkyusha, 1986.
- Matsuura, Tohru, comp. and anno. *Keats' Sonnets*. Tokyo: Azuma Shobo, 1966.
- Morris, R., ed. *The Works of Edmund Spenser*. London: Macmillan and Co., Limited, 1910.
- Narita, Seiju, ed. *An English and American Literary Calendar: Spring*. Tokyo: Kenkyusha, 1968.
- Odashima, Yushi, trans. *Cymbeline*. Hakusui-U-Books. Tokyo: Hakusuisha, 1987.
- Onishi, Hiroto and Chris McVay. *Native Speakers' English Grammar 2*. Tokyo: Kenkyusha, 1996.
- Onizuka, Mikihiro. *A Mechanism of English Grammar*. Tokyo: Pureisu, 2006.
- . *English Grammar is Alive*. Tokyo: Kawadeshobo-Shinsha, 2005.
- Robertson, Ian, ed. *Ireland*. Blue Guide. Fourth Edition. London and Tonbridge: Ernest Benn Limited. 1979.
- Sato, Kiyoshi, trans. *Shelley's Poems*. Apollon Soshō. Tokyo: Apollon-sha, 1966.
- Selincourt, E. De, ed. *The Poems of John Keats*. Fourth Edition. London: Methuen and Co. LTD., 1920.
- Shakespeare, William. *Cymbeline*. trans. Tsubouchi Shouyou. Tokyo: Shinjusha, 1958.
- . *Macbeth*. trans. Nogami Toyochiro. Iwanami-Bunko 1694–1695. Tokyo: Iwanami-Shoten, 1958.
- . *Othello: The Moor of Venice*. trans. Ooyama Toshikazu. Obunsha-Bunko. Tokyo: Obunsha, 1969.
- . *Romeo and Juliet*. trans. Honda Akira. Iwanami-Bunko 32-204-1. Tokyo: Iwanami-Shoten, 1984.
- . *King Lear*. Trans. Saito Takeshi. Iwanami-Bunko. 3716–3717a. Tokyo: Iwanami-Shoten, 1958.
- Shibata, Tetsuo and Haruhiko Fujii. *An Introduction to English Language Again*. Tokyo: Nan'un-do, 1985.
- Skeat, Walter W., ed. *The Complete Works of Geoffrey Chaucer*. London: Oxford UP, 1962.
- The Complete Poetical Works of John Keats*. Autograph Poets. Boston and New York: Houghton Mifflin Company, 1912.
- Tone, Masahito. *See Prepositions, You Will See English*. Tokyo: The Japan Times, 2007.
- Yamato, Yasuo, *Keats and the Oldest Poets*. A Monthly Newsletter 3. Tokyo: Hakuosha, 1974.
- Yoshitake, Michio. *My Favourite English Poems*. Tokyo: Chukyo-Shuppan, 1981.
- Ueda, Kazuo, trans. *Shelley's Poems*. Shincho-Bunko 2658. Tokyo: Shinchosha, 1980.

※拙文の作成にあたって次の事典・辞書・聖書などを参考にした。それぞれ付記しなかったものもあるので、お断りしておきたい。

- Kaizuka, Sigeki, et al. *Kadokawa's Chinese and Japanese Middle Dictionary*. Tokyo: Kadokawa-Shoten, 1963.
- Kihara Kenzo. *The New Century English-Japanese Dictionary*. Tokyo: Sansei-Do, 1996.
- Koike Yoshio. *Kenkyusha's New English-Japanese Dictionary*. Fifth Edition. Tokyo: Kenkyusha, 1982.

- Konishi Tomoshichi. *Taishukan's Fresh Genius English-Japanese Dictionary*. Tokyo: Taishukan Shoten, 1996.
- . *New Shogakukan Random House English-Japanese Dictionary*. Second Edition. Tokyo: Shogakukan, 1998.
- Saito Takeshi, et al. *The Kenkyusha Dictionary of English and American Literature*. Third Edition. Tokyo: Kenkyusha, 1996.
- Shibata Tetsushi, et al. *The Anchor English-Japanese Dictionary*. Second Edition. Tokyo: Gakushu-Kenkyusha, 1986.
- Shimamura Morisuke, Doi Kouichi, et al. *Iwanami's Simplified English-Japanese Dictionary*. Tokyo: Iwanami-Shoten, 1976.
- Shinmura, Izuru, ed. *Japanese Dictionary (Kojien)*. Third Edition. Tokyo: Iwanami-Shoten, 1983.
- Sinclair, John, et al., eds. *Collins Cobuild English Dictionary*. London: Harper Collins Publishers, 1995.
- The Holy Bible*. Tokyo: Japan Bible Society, American Bible Society, British & Foreign Bible Society, 1956.
- The Holy Bible Containing the Old and New Testaments*. London: Collin' Clear-Type Press, n.d.
- Vries, Ad de. *Dictionary of Symbols and Imagery*. Amsterdam / London: North-Holland Publishing Company, 1974.
- . *Dictionary of Symbols and Imagery*. trans. Yamashita Keiichiro, et al. Tokyo: Taishukan-Shoten, 1999.
- Yamada, Toshio, et al. *Shincho Japanese Dictionary*. Second Edition. Tokyo: Shinchosha, 1995.